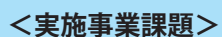


# 岐阜県における看護活動の充実に向けて

岐阜県立看護大学



●印の事業課題で修了証または参加証を発行

- 利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援
- 専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会
- 養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会
- 看護実践研究学会への研究支援
- 高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会



岐阜県立看護大学  
GIFU COLLEGE OF NURSING



## 本冊子の刊行にあたって

本冊子は、本学が岐阜県下の保健師・助産師・看護師・養護教諭に対して、開学2年目にあたる平成13年度から実施してきている研修活動の令和4年度の実績について、その報告を取りまとめたものです。

本学では、この研修活動は「看護実践研究指導事業」として位置づけ、教員が企画・実施してきました。この事業は本学が県立大学であることを強く認識し、看護学の高等教育機関の社会的使命や在り方を検討した結果、岐阜県内の看護職者の質向上を実現する一つの手段として取り組んだものです。

実施に際しては、看護職者が自ら実践研究の実施を奨励すること、岐阜県という極めて広範な地域を視野に入れたケアサービスの質向上を目指すこと、研修受講機会が豊かになるよう看護職者への働きかけを重視すること、などに留意しました。

一般市民に対して公開講座等の活動を実施している大学が多くありますが、本学では対象を看護職者に絞って研修の機会を提供することを優先的に実施しています。

開学以来、基本の方針は変更せずに取り組んできましたが、これまでの成果をどう評価するか、今後どのような方向に進めるべきか、内部での検討や広く外部からの評価を受けることが重要となります。

本冊子を手にした方々には、お気づきの点を本学教員に伝えていただくか、看護研究センターまでお知らせいただくようお願い申し上げます。

令和5年3月

岐阜県立看護大学 看護研究センター

# 目 次

## 令和 4 年度 看護実践研究指導事業報告

I. 本事業の目的と実施概要	1
II. 研修別報告	
1. 利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた 看護職者への教育支援	7
2. 専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	23
3. 養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	27
4. 看護実践研究学会への研究支援	35
5. 高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会	41

## 資料

・ 看護実践研究指導事業の趣旨	53
・ 実施した研修と対象・方法	54
・ 研修を支えた教員数	55
・ 平成 13 年度～令和 4 年度の看護実践研究指導事業一覧	56
・ 報告書作成依頼と執筆要項	59
・ 自己点検評価の実施要領	62

# **令和 4 年度 看護実践研究指導事業報告**

## **I . 本事業の目的と実施概要**



## 本事業の目的と実施概要

### I. 本事業の目的

平成 13 年度から開始した本事業も今年度で 22 年目を迎え、引き続き、県内看護職が大学の知的資源を利用して自己学習や業務改善ができるようにすることを目指し、看護の実践研究指導・研修の事業として取り組んだ。事業の実施に際しては、単に研修や指導を行うのではなく、県内看護職の現状を把握して、現場の実態に即応した適切な指導・研修の方法を模索しながら行うこととし、現職者自身による問題解決を促進していくことを重視している。

他方、大学としては、これらの活動をする一方で、今後の学部・大学院教育の充実を図り、特色ある活動を導くことを念頭においている。

したがって、本事業はその目的において下記のような特徴を備えている。

- ・県内看護職が大学の知的資源を利用して自己研鑽や日常の業務改善ができるようにすることを目指す看護の実践研究に関する事業である。
- ・県立大学であることを強く認識し、看護学の高等教育機関の社会的使命や在り方を踏まえて県内看護職の質の向上を実現する一つの手段として取り組む事業である。
- ・単に知識伝達型の一方通行的な講義で行うのではなく、大学教員が現場に出向いて県内看護職の現状を把握することを基本とする、県内看護職やその実践の実態に即応した適切な指導・研修の方法を開発する、県内看護職自身の主体的問題解決を促進する、などを重視する事業である。
- ・看護学科や大学院看護学研究科の教育研究環境の一層の充実を図り、本学で育成した人材の県内施設への就業と定着しやすい環境づくりを目指して取り組む事業である。

### II. 本事業の研修方法

研修方法は、教員が対象に合わせて創出することとしているが、①教員が看護職者の現場に出向いて現状を把握し、②看護職者や看護実践の実態に応じた指導・研修方法を開発しながら取り組むもので、③看護職者自身の主体的な問題解決を促すことを重視してきている。

また、看護職者の主体的な実践研究の実施を奨励すること、岐阜県という広範な地域を視野に入れてケアサービスの質向上を目指すこと、課題解決に向けた方策を研修受講者同士が話し合っ創出すること、少人数配置など研修機会が得られがたい看護職者を対象にした研修を企画・実施すること、研修機会を通じた他施設との交流や看護職者同士のネットワークづくり等にも留意してきている。

したがって、本事業の研修方法の要件を整理すると以下ようになる。

- ・県内看護職が日ごろ実施している看護実践活動の実態と課題を確認し、彼らが提供する看護実践の質向上を図る上で有効であるとして大学教員が企画した研修である。
- ・特定施設や特定地域に限定することなく、提起した課題に関する研修は、県内全域の状況に対して責任を持って企画することを基本とした研修である。
- ・専門職である県内看護職に対して、自己の技術や実践方法の改善・充実について研究的取り組みを行う看護実践研究の実施を大学として奨励することを手段としつつ、主体的専門職者育成を前提にして企画した研修である。

### III. 今年度事業の実施

本事業には、大学と岐阜県内の看護実践現場の看護職者との連携や組織的関係を強化するという観点から、看護研究センターの教員が本事業の全体的な調整や報告書の取りまとめを担当している。

例年同様、年度当初の 4 月に学内から事業課題の募集を行った。

今年度は「利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援」「専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会」「養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会」「看護実践研究学会への研究支援」「高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会」の計 5 つの継続事業課題が申請され、このうち「高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会」は今年度から取り組む新規の事業課題である（表 1）。

表 1 令和 4 年度看護実践研究指導事業の実施一覧

No.	開始年度	事業課題名	担当者
0401	平成 24 年度 (11 年目)	利用者ニーズを基盤とした 入退院支援の質向上に向け た看護職者への教育支援	地域基礎看護学領域：藤澤まこと、加藤由香里、柴田万智子 木下拓哉 機能看護学領域：橋本麻由里、田辺満子 看護研究センター：長屋由美 岐阜県健康福祉部医療福祉連携推進課対策監：加藤直子
0402	平成 28 年度 (7 年目)	専門看護師の看護実践の質 向上を目指す研修会	看護研究センター：奥村美奈子 成熟期看護学領域：布施恵子、船橋眞子 地域基礎看護学領域：藤澤まこと、加藤由香里、柴田万智子 育成期看護学領域：岡永真由美、茂本咲子 機能看護学領域：橋本麻由里
0403	平成 28 年度 (7 年目)	養護教諭のスキルアップと 養護教諭像の醸成を目指し た学びの会	育成期看護学領域：亀山智加枝 機能看護学領域：松本訓枝
0404	令和元年度 (4 年目)	看護実践研究学会への研究 支援	看護研究センター：大川眞智子、奥村美奈子、長屋由美 足立円香 前 岐阜県立看護大学：小森春佳
0405	令和 4 年度 (1 年目)	高齢者の誤嚥・窒息ゼロを 目指す研修会	機能看護学領域：古澤幸江、米増直美、宗宮真理子 成熟期看護学領域：宇佐美利佳

#### Ⅳ. 今年度事業の運営

今年度の事業運営にあたっての年間スケジュールを表 2 に示す。

前年度末の 3 月の教員会議で今年度の事業課題募集について資料を配布して説明し、事業課題の申請を開始し、申請の締め切りは例年同様、年度が替わった 4 月 25 日（月）正午とした。

申請された事業課題の応募様式について看護研究センター内で確認し、5 月 11 日（水）17 時から演習室 306 で開催した第 1 回代表者等会議（表 3）で今年度の事業計画を応募様式とは別に準備してもらった事業計画の説明資料をもとに意見交換を行った。

その際に看護研究センターから出された事業計画に関する不明点等についての質疑応答も行い、さらに本事業の年間計画と予算執行等の留意事項、ホームページでの研修会の開催案内と報告のお願い、研修受講者への修了証の交付手続き、報告書の作成と原稿の分量等のお願いについて代表者に対して伝え、センターへの要望の有無を確認している。

看護実践研究指導事業は共同研究事業と異なり、共同研究報告と討論の会のような事業の進捗や成果について共有する機会が無い場合、この代表者等会議は事業課題の代表者とセンターで今年度の事業を進める上で必要な事項等を共有する場として開催している。

第 1 回代表者等会議の翌日の 5 月 12 日（木）に第 1 回看護研究センター運営委員会が開催されて申請された事業課題の内容と年度計画および必要な予算について審議され、委員会での承認後に事業課題は開始となった。ただし、予算執行は財務会計システムへの予算額、代表者と会計責任者への執行権限付与などの登録作業が必要となるので、委員会後に事務局総務課へ登録作業を看護研究センターから依頼し、登録作業完了後に執行が可能となっている。

例年、12 月に開催している第 2 回代表者等会議は、昨年度と同様に開催せず、中間報告を様式に従って作成してもらい、メールで提出してもらった。メールでの提出期限は 12 月 12 日（月）正午とし、看護研究センターとして各事業課題の進捗状況を把握した。

報告書原稿、代表者による自己点検評価、事業で関与した看護職者（個別訪問面接研修、集合研修参加、ワークショップ参加等）が所属する施設の一覧表の提出期限は令和 5 年 2 月 24 日（金）正午とし、事前に看護研究センター事務局から各事業課題の代表者に配布した USB メモリにそれぞれのファイルを保存後、その USB メモリを提出してもらった。



表 2 令和 4 年度看護実践研究指導事業の年間スケジュール

年月日時	実施内容
2022 年 3 月 17 日 (木)	教員会議で「看護実践研究指導事業の趣旨説明書」「令和 4 年度看護実践研究指導事業 年間計画 (案)」「令和 4 年度用看護実践研究指導事業応募様式：新規用」「令和 4 年度用看護実践研究指導事業応募様式：継続用」を資料として配布し、令和 4 年度の事業課題募集について説明
2022 年 4 月 25 日 (月)	事業課題申請の締め切り
2022 年 5 月 11 日 (水)	第 1 回代表者等会議の開催
2022 年 5 月 12 日 (木)	第 1 回看護研究センター運営委員会で申請された事業課題の内容・年度計画と予算配分の審議・承認
2022 年 12 月 12 日 (月)	事業課題の進捗状況の中間報告の提出締め切り
2023 年 2 月 24 日 (金)	報告書原稿、代表者による自己点検評価、事業で関与した看護職者（個別訪問面接研修、集合研修参加、ワークショップ参加等）が所属する施設の一覧表の提出期限 ※消耗品・備品・図書の購入依頼書の起案締め切り
2023 年 3 月 31 日 (金)	報告書の完成・納品

表 3 代表者等会議の開催概要

日程	参加者	内容
第 1 回 5 月 11 日 (水) 17:00～18:30	代表者：藤澤、奥村、亀山、大川、古澤 看護研究センター：会田（進行）、長屋（記録）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前年度の予算執行状況報告</li> <li>・今年度の事業計画の説明と意見交換</li> <li>・その他</li> </ul>

表 4 令和 4 年度看護実践研究指導事業の予算

No.	代表者	事業課題名	予算
0401	藤澤まこと	利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	292, 806
0402	奥村美奈子	専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	45, 340
0403	亀山智加枝	養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	81, 080
0404	大川眞智子	看護実践研究学会への研究支援	496, 776
0405	古澤幸江	高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会	253, 548
小計			1, 169, 550
共通	修了証用上質紙		3, 000
	報告書印刷費（抜刷分含む）		170, 000
	人件費（66 日×4500 円）		300, 000
	予備費		127, 000
	小計		600, 000
合計			1, 769, 550

今年度申請された 5 つの事業課題の予算は、看護研究センター運営委員会と看護研究センターの意見等を受けて修正されたものが 5 月下旬頃までに各代表者から提出され、合計が 1,169,550 円であった。これに共通経費 600,000 円を加えた 1,769,550 円が本事業の当初予算である。

事業課題ごとの予算配分は表 4 に示したとおりである。なお、本事業は予算の執行率 100%を目指すものではないので、各事業課題の進捗状況等を踏まえて適切に執行することを第一とし、予算が残ることに関しては問題としていない。他方、当初予算をオーバーする場合は看護研究センターに申し出てもらい、看護研究センターに配分されている共通経費の予備費の中から予算科目振替による支出を行い、不足分を補填している。今年度は年度末に予算残高が不足して執行ができなくなり、共通経費の予備費から執行振替を行った事業課題はなかった。

今年度の各事業課題の研修等の実施状況を示したのが表 5 である。

「看護実践研究学会への研究支援」を除く 4 つのすべての事業課題で研修を実施できており、オンライン研修だけでなく従来からの個別訪問面接研修や集合研修も開催できていた。

看護職者が生涯学習の一環で本事業の研修に参加（修了）したことを証明し、職場等にも提示できるように、平成 25 年度から事業代表者の要請に応じて、本事業の研修参加者に対して修了証や参加証（図 2-1）を大学として発行してきているが、今年度は 3 つの事業（0401、0402、0405）の研修で修了証または参加証を発行した。

表 5 事業別の研修等実施状況

No.	事業課題名	今年度の実施状況
0401	利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	<p>ベーシック研修 参加者 49 名（修了証発行） 2022 年 9 月 21 日（水）9 時～16 時 Zoom によるオンライン研修</p> <p>アドバンス研修（3 回）参加者 8 名（修了証発行） 第 1 回：2022 年 9 月 29 日（木）14 時～16 時 第 2 回：2022 年 10 月 27 日（木）14 時～16 時 第 3 回：2022 年 11 月 24 日（木）14 時～16 時 対面開催（会場：岐阜県立看護大学）</p> <p>エキスパートミーティング 参加者 10 名（修了証発行） 2022 年 12 月 12 日（月）15 時～17 時 Zoom によるオンライン研修</p>
0402	専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	<p>研修会企画に関する検討会（3 回） 2022 年 10 月 3 日（月）、11 月 29 日（火）、 2023 年 2 月 7 日（火）</p> <p>専門看護師資格 5 年目更新に向けた研修会 2023 年 2 月 14 日（火）18 時～19 時 30 分 参加者 16 名（参加証発行 9 名）、オンライン研修（Teams）</p> <p>専門分野を超えた研修会 2023 年 3 月 7 日（火）18 時～19 時 30 分 参加者 24 名（参加証発行 15 名）、オンライン研修</p>
0403	養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	<p>第 1 回：2022 年 8 月 27 日（土）13 時 20 分～16 時 30 分 テーマ「養護教諭のスキルアップとネットワークづくりを目指して」、参加者 22 名、岐阜県立看護大学での開催と Zoom によるオンラインを併用したハイブリッド研修</p> <p>第 2 回：2022 年 12 月 4 日（日）13 時 20 分～16 時 30 分 テーマ「校種を超えて広い視野で職務を考える」 参加者 29 名、岐阜県立看護大学での開催と Zoom によるオンラインを併用したハイブリッド研修</p>

0404	看護実践研究学会への研究支援	令和3年度に支援を開始し、令和4年度も継続した研究課題(2題)対象は病院(2施設)の看護師4名、他職種4名。ただし、令和3年度開始分の1題については研究中止となっている。 令和4年度に支援を開始した研究課題(3題) 対象は病院(3施設)の看護師6名 「研究論文の投稿支援」に関しては、1件の研究課題について投稿支援を行っていたが、令和4年度に取り下げられた。
0405	高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会	第1回：2022年7月16日(土)9時30分～12時30分 テーマ「事例から学ぶ 誤嚥・窒息 ZERO」参加者86名、 オンライン研修(Zoom) 第2回：2022年12月10日(土)9時30分～12時30分 テーマ「シームレスな多職種連携」 参加者88名(修了証発行15名)、岐阜県立看護大学での開催とオンラインを併用したハイブリッド研修




 <p>岐阜県立看護大学 GIFU COLLEGE OF NURSING</p> <p>第04〇〇-〇〇号</p> <h2 style="text-align: center;">修了証</h2> <p style="text-align: center;">〇〇〇〇病院 羽島 花子</p> <p>あなたは岐阜県立看護大学の実施した令和4年度看護実践研究指導事業研修「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇」を修了したことを証します</p> <p>令和〇〇年〇〇月〇〇日</p> <p>岐阜県立看護大学長 北山 三津子</p> 	<h3 style="background-color: #0072bc; color: white; padding: 5px;">令和4年度 看護実践研究指導事業</h3> <p><b>所属：</b> _____</p> <p><b>氏名：</b> _____</p> <h3 style="background-color: #a6c9ec; padding: 5px;">参加証</h3> <p><b>令和4年度看護実践研究指導事業研修に参加されたことを証明します。</b></p> <p style="text-align: right;">令和 年 月 日 ( )</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;">  <div> <p><b>岐阜県立看護大学</b> GIFU COLLEGE OF NURSING</p> </div> </div>
--	--

図 2-1 看護実践研究指導事業の修了証(左)と参加証(右)

本事業による研修会・ワークショップ等の開催日時・場所については例年同様、必要に応じて本学ホームページで公開して情報発信に努めた。本事業の実績と成果を明示するために、平成21年度から本事業の報告書をPDF化し、本学ホームページにて公表してきたが、平成27年度から本事業の報告書を本学リポジトリで公開することを開始し、倫理面に関して十分に配慮するよう執筆要項に明示するとともにリポジトリでの公開にあたって事業課題ごとに3～5個のキーワードを付けてもらっている。今年度の報告書は3月末の納品後にPDF化し、令和5年4月以降に大学リポジトリで公開する。

事業課題ごとの自己点検評価は、平成25年度より事業課題の代表者の教員が構成員の意見を総括して自己点検評価フォーマットに入力する方法に変更している。代表者による各事業課題の自己点検評価は、大きく5つの観点(「実践の場にも与えた影響」「本学の教育・研究活動にも与えた影響」「本事業を通して捉えた看護職の生涯学習ニーズ」「本事業を実施する上で困難な点・課題」「今後の発展の方向性」)から行い、さらに「実践の場にも与えた影響」は「①看護活動の変化」と「②看護職の行動・認識の変化」の2つに分け、「本学の教育・研究活動にも与えた影響」については「①教育活動への効果」と「②研究活動への発展」の2つに分けている。「実践の場にも与えた影響」の「①看護活動の変化」と「②看護職の行動・認識の変化」は研修会直後の看護職の様子や自己点検評価からの判断になるが、変化が確認できるという肯定的評価である。

「本学の教育・研究活動に与えた影響」については「①教育活動への効果」は学部学生の授業や実習指導において良い影響があるという評価であった。例年「②研究活動への発展」までには至らないことが多いが、今年度は1課題（0405）で協力者である看護職と共同研究を開始していた。「本事業を通して捉えた看護職の生涯学習ニーズ」については新たな研修内容など高いニーズが複数の事業課題で確認できている。それを踏まえて「今後の発展の方向性」も検討されており、いずれの課題も次年度も継続の予定である。「本事業を実施する上で困難な点・課題」については実施の支障となるような問題点は挙げられていなかった。むしろ実践現場においてまだコロナ禍の影響が残っていることが大きいと推察された。

今年度の事業課題で実施した研修等に参加した看護職（養護教諭を含む）が所属する施設を事業で関与した施設としてまとめたのが表6である。事業課題0401、0402、0404では事業課題名からもわかるように看護職を対象としているので関与した施設はほぼ病院である。また、事業課題0403は養護教諭を対象としているので関与した施設は教育機関である。研修会によっては参加者が看護職だけでなく他職種も含まれる場合があり、事業課題0405がそれに該当し、表6では区別せずに関与した施設を集計している。

表6 今年度の事業で関与した施設

No.	事業課題名	施設の内訳
0401	利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	病院 26
0402	専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	病院 11、診療所 1、訪問看護ステーション 1、所属なし 2
0403	養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	小学校 17、中学校 9、高等学校 9、大学 2、特別支援学校 3、教育委員会 2
0404	看護実践研究学会への研究支援	病院 4
0405	高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会	病院 20、特別養護老人ホーム 9、介護老人保健施設 8、歯科医院 6、介護老人福祉施設 3、訪問看護ステーション 3、高齢者介護施設 1、社会福祉法人 1、看護大学 1、看護専門学校 1、歯科医師会 1、歯科衛生士会 1、薬局 1、出版社 1、所属なし 2

## **Ⅱ．研修別報告**

### **1．利用者ニーズを基盤とした入退院支援の 質向上に向けた看護職者への教育支援**



# 利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援

キーワード： 入退院支援教育プログラム 利用者ニーズ 人材育成

## I. 目的および背景

### 1. 目的

本事業の目的は、県内の入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育的支援として、県健康福祉部医療福祉連携推進課と協働で「入退院支援教育プログラム(2022 年度)」を策定・施行し、利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援を推進し、人材育成の方策を追究することである。

### 2. 背景

わが国では急速な少子高齢化のなかで、団塊の世代が後期高齢者となる 2025 年に備え医療・介護のあり方、医療提供体制の改革が進められている。2014 年度の診療報酬改定では、医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実に取り組み、医療提供体制の再構築や「地域包括ケアシステム」の構築を図ることが基本認識・重点課題として示され、在宅復帰率の導入等により在宅移行が推進されることとなった。また 2016 年度の診療報酬改定では、「退院支援加算」が新設され、病棟の退院支援業務等に専従する職員の配置や、多職種による早期のカンファレンス、退院直後の看護師等による訪問指導の実施による退院支援の充実等、「地域包括ケアシステム」の推進に向けた取り組みが示された。

2018 年度の診療報酬改定では、退院支援加算が入退院支援加算に変更され、入院予定者が入院生活や入院後の治療過程がイメージでき、安心して入院医療が受けられるための支援が求められるようになった。そのため医療者側が褥瘡・栄養・薬剤等のリスクや、入院前に受けていたサービス・退院困難要因等を入院前に把握し、入院前からの退院支援が推進されるようになった。2020 年の診療報酬改定では、入退院支援の取り組みの推進として、関係職種と連携して入院前の支援を実施し、病棟職員との情報共有や患者またはその家族等への説明等を行う場合の評価が新設された。また高齢者の総合的な機能評価を行ったうえで、その結果を踏まえて支援を行う場合の総合評価加算が新設された。

医療提供体制が地域完結型へと移行される中で、保健医療福祉サービス利用者が医療機関を退院した後も住み慣れた場所で望む療養生活を続けるためには、利用者ニーズに対応できるよう入退院支援に必要な知識・技術を修得し、多職種と連携・協働しながら支援方法を構築していく能力をもつ看護職者の人材育成が重要となる。

本事業では、2012 年度から県健康福祉部医療福祉連携推進課と大学が協働して、利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援を推進し、人材育成の方策を追究している。その方策として、2012 年度には県内の全看護職者への教育支援として、看護職者が入院時から利用者ニーズに対応した退院支援が実践できるように、大学において講義・ワークショップを開催した。

2013 年度から「退院支援教育プログラム(2013 年度)」を策定し、看護職者の知識・意識の向上に焦点を置き、退院支援に関する知識を確実に修得できるよう、講義・ワークショップ内容の充実を図った。2014 年度は「退院支援教育プログラム (2014 年度)」を策定し、講義・ワークショップをベース研修と位置づけるとともに、ベース研修修了者を対象とした「フォローアップ研修 (事例検討)」を加え、退院支援の取り組みのリフレクションを行い、新たな知見を得ることを目指した。そして、「退院支援教育プログラム (2015 年度)」では、フォローアップ研修に 1 年間の取り組みの振り返りを加えた。フォローアップ研修において、多施設の看護職者ととともに 1 年間の入退院支援の取り組みを振り返ることで、自部署での取り組みの成果と課題がより具現化されていた。

2016 年度の「退院支援教育プログラム (2016 年度)」では、ベース研修、フォローアップ研修に加え、フォローアップ研修修了者を対象に、参加者自身の取り組んだ事例を提示して事例検討を行うアドバンス研修を加えた。ベース研修、フォローアップ研修では、研修参加者の知識・認識の向上につながり、利用者ニーズを基盤とした退院支援の取り組みにつながることを確認した。アドバンス研修参加者は 3 回継続して事例検討に参加する中で、利用者主体の入退院支援が考えられるようになり、検討内容の深化がみられた。

2018 年度は、「退院支援教育プログラム(2018 年度)」の施行にあたり、アドバンス研修修了者に、フォローアップ研修のグループ討議のファシリテートを依頼し、新たな知見を得る機会を提供した。各研修修了者への質問紙調査による学びの確認では、ベース研修から更に、フォローアップ研修、アドバンス研修へと研修を重ねることで、利用者ニーズを基盤とした入退院支援の具体的実践につながっていることが分かった。特にアドバンス研修修了者は、自施設の退院支援の強みや課題を客観的に捉え、退院支援体制構築に向けた具体的な取り組みについて考えることができることが確認できた。

「入退院支援教育プログラム (2019 年度)」は、フォローアップ研修、アドバンス研修に焦点化して

施行した。2020 年度の「入退院支援教育プログラム（2020 年度）」は、アドバンス研修に、アドバンス研修修了者への教育支援として「エキスパートミーティング」を加えて施行した。エキスパートミーティングはアドバンス研修修了後の入退院支援の質向上に向けた取り組みの実際を共有し、地域包括ケアシステムの中での入退院支援の質向上に向けた今後の取り組み等の検討の機会とした。2021 年度は、2020 年度を踏襲した「入退院支援教育プログラム（2021 年度）」を開催すると共に、本事業 8 年間の成果を把握するための質問紙調査を行った。

また、2022 年度は、ベーシック研修、アドバンス研修、エキスパートミーティングを含む「入退院支援教育プログラム（2022 年度）」を開催するとともに、修了者を対象に質問紙調査を実施して本事業の評価を行った。その結果より医療機関で中核となって入退院支援の質向上に取り組むことができる人材育成の方策について検討した。

表 1 入退院支援教育プログラム（2022 年度）

**【ベーシック研修】**

**講義1 入退院支援の意義とその役割**

1) 入退院支援の意義

- (1) 入退院支援が必要になった背景
- (2) 退院支援と退院調整
- (3) 入退院支援に係わる診療報酬改定

2) 入退院支援における看護師の役割

- (1) 入院前支援
- (2) 入院時アセスメントとスクリーニング
- (3) 多職種参加のカンファレンス
- (4) 退院前カンファレンス
- (5) 退院後支援

3) 入退院支援の課題

**講義2 医療・介護福祉制度と社会資源**

1) 高齢化の現状

2) 介護保険制度のしくみ・変遷

- (1) 介護保険制度のしくみ
- (2) 介護保険制度の変遷

3) 介護保険制度と社会資源

**講義3 在宅療養支援と社会資源の活用**

1) 在宅療養支援と社会資源

- ① 住宅改修、② 福祉用具購入・貸与、③ 訪問介護、④ 訪問入浴、⑤ 訪問看護

2) 社会資源の活用と退院前カンファレンス

**講義4 入退院支援のプロセスと多職種連携**

1) 入退院支援のプロセス・支援の実際

2) 入退院支援担当部署の役割

3) 入退院支援看護職の人材育成

4) 地域の専門職等との連携

5) 今後の課題

**講義5 多職種連携および地域との連携ー訪問看護師の立場から**

1) 入退院支援の連携における看護師の役割

2) 地域とよりよい連携のための取り組み

**グループ討議：テーマ「自施設の入退院支援の現状と課題」**

グループ討議内容の共有・まとめ

**【アドバンス研修】**

[第 1 回目]

**事例検討1** 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション

**事例検討2** 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション

[第 2 回目]

**事例検討3** 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション

**事例検討4** 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション

[第 3 回目]

**事例検討5** 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション

**事例検討6** 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション



## 【エキスパートミーティング】

### 取り組み事例の報告1

### 取り組み事例の報告2

### 意見交換

## II. 事業担当者

本事業は以下の担当者で実施する。

地域基礎看護学領域：藤澤まこと、加藤由香里、柴田万智子、木下拓哉

機能看護学領域：田辺満子、橋本麻由里

看護研究センター：長屋由美

岐阜県健康福祉部医療福祉連携推進課：加藤直子

## III. 実施方法

### 1. 県内の入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育的支援として、県健康福祉部医療整備課と協働で、「入退院支援教育プログラム（2022年度）」の施行

#### 1) ベーシック研修の施行

ベーシック研修の対象者は、県内の全看護職者を対象とする。研修内容としては、講義により入退院支援に関する知識の修得、入退院支援の取り組みの理解の機会を提供する。またグループ討議を実施し、自施設の入退院支援の現状・課題についての意見交換を行う。

#### 2) アドバンス研修の施行

アドバンス研修の対象者は、フォローアップ研修修了者とする。参加者自身が退院支援に取り組んだ事例を提示して事例検討を行う。その際、各自1回事例検討のファシリテートを担当する。意見交換をとおして自部署の退院支援の充実に向け、自ら取り組むための知見を得る機会とする。参加者は研修ごとに事例検討により学び考えたこと、今後実践できるとよいと思ったことをリフレクションシートに記載する。また研修修了後に最終レポートを提出する。

#### 3) エキスパートミーティングの施行

エキスパートミーティングの対象者は、アドバンス研修修了者（修了見込みも含む）とする。アドバンス研修修了後の入退院支援の質向上に向けた取り組みの実際を共有し、今後の地域包括ケアシステムの中での入退院支援の質向上に向けた取り組み等の検討の機会とする。

#### 4) 修了証の交付

各研修における学びの内容を確認し、修了証を交付する。

### 2. 「入退院支援教育プログラム（2022年度）」の成果把握のための質問紙調査の実施

本年度は、ベーシック研修、アドバンス研修、エキスパートミーティングを含む「入退院支援教育プログラム（2022年度）」を開催し、修了者を対象に質問紙調査を実施して当該事業の評価を行い、その結果より医療機関で中核となって入退院支援の質向上に取り組むことができる人材育成の方策について検討する。

1) 対象：「入退院支援教育プログラム（2022年度）」に参加したベーシック研修参加者49人、アドバンス研修参加者8人、エキスパートミーティング参加者10人である。

2) 調査方法：各研修終了後に質問紙調査への協力を依頼し、自由意思による回答を得る。研修終了後に質問紙を発送し、返送をもって同意が得られたこととした。

#### 3) 調査内容

質問紙調査内容は以下の通りである。記載時間は約20分である。

①ベーシック研修参加者：看護師としての経験年数、所属部署、研修に参加して一番学びが大きかったこと、利用者ニーズを基盤とした入退院支援に必要と考えたこと、本研修に期待したこと・それは学べたか等。

②アドバンス研修参加者：看護師としての経験年数、所属部署、研修に参加して一番学びが大きかったこと、利用者ニーズを基盤とした入退院支援に必要と考えたこと、自部署で実現するためにどのような退院支援体制を構築していくか、本研修に期待したこと・それは学べたか等。

③エキスパートミーティング参加者：看護師としての経験年数、所属部署、研修に参加して一番学びが大きかったこと、利用者ニーズを基盤とした入退院支援に必要と考えたこと、地域包括ケアシステムの中で利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質の向上に向けて、今後取り組みたいこと、本研修に期待したこと・それは学べたか等。

4) 分析方法：経験年数、所属部署の部分は単純集計し、自由記載の部分は、意味内容ごとの文脈に分けて要約し、質的に分類する。

### 3. 「入退院支援教育プログラム（2022 年度）」の改善、利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への人材育成の方策の検討

質問紙調査結果をもとに事業担当者間で検討し、「入退院支援教育プログラム（2022 年度）」の改善、利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への人材育成の方策を検討する。

### 4. 倫理的配慮

質問紙調査対象者であるベーシック研修参加者、アドバンス研修参加者、エキスパートミーティング参加者に、質問紙調査の依頼文書と質問紙を郵送した。依頼文書には、研究協力は個人の自由意思によるものとし、質問紙の返送をもって同意を得たこととすること、自由意思での回答を保障するため、個別の返信封筒により大学への返送を依頼したいこと、質問紙は無記名であるため送付された質問紙の内容の削除は不可能となること、研究データおよび結果は研究の目的以外に用いることはないことを明記した。また研究データの破棄については、電子媒体（USB）のデータはすべて消去すること、破棄の時期としては、当該研究終了日から 5 年を経過した日、又は当該研究の結果の最終の公表日から 3 年を経過した日のいずれか遅い日までの期間保存した後となることも明記した。また岐阜県立看護大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 0312）

## IV. 結果

### 1. 10 年間の「入退院支援教育プログラム」修了者数

県内の入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育的支援として、2013 年度から 10 年間実施してきた「入退院支援教育プログラム」の修了者の総数は 1089 人となり、内訳はベーシック研修 682 人、フォローアップ研修 294 人、アドバンス研修 85 人、エキスパートミーティング 28 人である。

表 2 9 年間の入退院支援教育プログラム修了者数

修了者数（人）	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	合計
ベーシック研修	84	145	115	122	97	70				49	682
フォローアップ 研修		27	68	52	61	40	46				294
アドバンス研修				15	10	17	14	11	10	8	85
エキスパートミ ーティング								7	11	10	28
計	84	172	183	189	168	127	60	18	21	67	1089

### 2. 入退院支援に関する「入退院支援教育プログラム（2022 年度）」の施行

県内の入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育的支援として、看護職者の知識・意識の向上に焦点を置き、退院支援に関する知識を確実に修得できるよう、「入退院支援教育プログラム（2022 年度）」を企画・開催した。「入退院支援教育プログラム（2022 年度）」でのベーシック研修、アドバンス研修、エキスパートミーティングの施行内容を以下に報告する。

#### 1) 入退院支援教育プログラム（2022 年度）ベーシック研修の施行

##### (1) ベーシック研修の施行

- ①開催日時：2022 年 9 月 21 日（水）9:00～16:00
- ②開催方法：講義及びグループ討議ともに、Zoom を用いてオンラインで行った。
- ③参加者：県内の医療機関に所属する入退院支援に関心のある看護職者を対象として、看護部長に当該施設の看護職者のベーシック研修への参加を依頼し、各施設 3 人までとして 49 人の参加を得た。
- ④参加施設：県内全医療機関 97 施設に参加を依頼し、22 施設よりの参加を得た。
- ⑤修了証交付人数：岐阜県立看護大学の看護実践研究指導事業に係る修了証を 49 人に交付した（表 2）。

##### (2) ベーシック研修の概要

入退院支援に関する知識を修得するための講義として、入退院支援の意義とその役割、医療・介護福祉制度と社会資源、在宅療養支援と社会資源の活用、入退院支援のプロセスと多職種連携、多職種連携及び地域との連携－訪問看護師の立場から、のテーマで 5 名の講師による講義を行った。その後、グループ討議として、参加者が 6～7 人ずつの 8 グループに分かれ、利用者ニーズを基盤とした自施設の入退院支援の現状・課題を把握することを目的に、「自施設の入退院支援の取り組みの現状と課題」をテーマに意見交換を行った。以下ベーシック研修の概要を表 3 に示す。

表3 ベーシック研修の概要

講義1 入退院支援の意義とその役割(講師) 東海中央病院地域連携メディカルサポートセンター副看護師長
講義2 医療・介護福祉制度と社会資源(講師) 岐阜県健康福祉部高齢福祉課 介護保険者係長
講義3 在宅療養支援と社会資源の活用(講師) 新生メディカル在宅介護推進課 ケアマネジャー
講義4 入退院支援のプロセスと多職種連携(講師) 岐阜清流病院地域医療連携センター副看護師長 退院調整看護師
講義5 多職種連携および地域との連携ー訪問看護師の立場から(講師) ひだ訪問看護ステーション主任訪問看護師
グループ討議: テーマ「自施設の入退院支援の現状と課題」
グループ討議内容の共有・まとめ
リフレクションシートの記入(Formsによるオンライン提出)、記載内容を確認して修了証交付

### (3) ベーシック研修参加者の研修に対する意見

研修終了後に記載を求めたリフレクションシートの最後にベーシック研修に対する意見を求めた。本研修に対し、「介護保険制度や社会資源など基礎から学ぶことができた」「入院前から退院支援を行うことの重要性を再認識した」「病院と地域の多職種との連携が重要性を学んだ」「他の病院の課題や入退院支援の現状を知り、自施設の課題が明確となった」「自施設も良い取り組みができていたことが分かった」「他施設が同じ悩みや課題に対して工夫していることを自施設でも取り入れて支援を充実させたい」等、講義とグループワークを行うことで入退院支援に関する学びが深められ、自施設の支援を見直す機会となっていた。また、「入退院支援の充実を目指して継続して学びを深めたい」等、入退院支援の充実を目指して本研修に継続的に参加を希望する意見もあった。

## 2) 入退院支援教育プログラム(2022年度)アドバンス研修の施行

### (1) アドバンス研修の施行

- ①開催日時 : 2022年9月29日(木) 14:00~16:00(第1回)  
2022年10月27日(木) 14:00~16:00(第2回)  
2022年11月24日(木) 14:00~16:00(第3回)
- ②開催方法: 岐阜県立看護大学内にて対面で行った。
- ③参加者: 昨年度までのフォローアップ研修修了者の看護職者を対象として、看護部長に当該施設の看護職者のアドバンス研修への参加を依頼し、各施設1人程度として8人の参加を得た。
- ④参加施設: 県内全医療機関97施設に参加を依頼し、7施設よりの参加を得た。
- ⑤修了証交付人数: 岐阜県立看護大学の看護実践研究指導事業に係る修了証を8人に交付した(表2)。

### (2) アドバンス研修の概要

本研修は、フォローアップ研修修了者が、自部署の退院支援の充実に向けて中核となり取り組めることを目指している。参加者はアドバンス研修前に郵送された「事例シート」に自身が取り組んだ事例をまとめ、アドバンス研修で学びたいことを明確にした上で参加した。事例検討では参加者は4人ずつの2グループに分かれ、事例ごとに交代でファシリテーターの役割を担った。また、研修ごとにリフレクションシートに学んだことや考えたことを記載し、3回の研修会終了後に最終レポートとして、提示事例に対する退院支援計画の考案、ファシリテートで取り入れたいこと、自部署の退院支援の充実に向け取り組みたいこと又は取り組み始めたことについての記載と提出を求めた。以下アドバンス研修の概要を表4に示す。

表4 アドバンス研修の概要

【アドバンス研修】
1. オリエンテーション(2回目からは前回のポイント内容の確認)
2. 自己紹介・役割決定
3. 事例報告・事例検討
4. 支援ポイントの確認
<p>アドバイザー: ・岐阜清流病院 地域医療連携センター 看護師長代理 退院調整看護師</p> <p>・訪問看護ステーションかがやき 管理者</p> <p>・岐阜保健大学 講師</p>
5. 各回リフレクションシート記入、3回の研修終了後に最終レポート記入、記載内容を確認して修了証交付

### (3) アドバンス研修参加者の研修に対する意見

研修会終了後に最終レポートの最後にアドバンス研修に対する意見を求めた。

本研修に対し、「他施設の退院支援の取り組みを聴くことができ参考にした」「訪問看護師のアドバイザーからの意見は、病院側では気づかないアドバイスをいただけ有意義だった」「研修で学んだことをもとにスタッフと話し合うきっかけができた」等、他施設の看護職と多くの事例を検討することで退院支援に関する視野の広がりや、自施設での支援や人材育成について見直す機会となっていた。また、検討の助けとなるよう記録を担当する人を事例ごとに決めて事例検討を進めたが、「書記を行うことで話し合いへの参加が疎かになってしまい難しい」等、事例検討での役割についての意見もあった。

## 3) 入退院支援教育プログラム(2022年度) エキスパートミーティングの施行

### (1) エキスパートミーティングの施行

①開催日時：2022年12月12日(月) 15:00～17:00

②開催方法：Zoomを用いてオンラインで行った。

③参加者：アドバンス研修修了者(修了見込みも含む)の看護職者を対象として、当該者へ参加を依頼し、発表者2人を含む10人の参加を得た。

④参加施設：県内25施設85に参加を依頼し、10施設10人の参加を得た。

⑤修了証交付人数：岐阜県立看護大学の看護実践研究指導事業に係る修了証を10人に交付した。

### (2) エキスパートミーティングの概要

岐阜県における利用者ニーズを基盤とした今後の入退院支援のあり方を考え、新たな知見を見出すことを目指し、県内の2施設の「入退院支援教育プログラム：アドバンス研修」修了者に、自施設における入退院支援の取り組み事例の報告を得た。その後参加者と、コロナ禍での入退院支援の現状や取り組み等についての自由な意見交換を行った。以下エキスパートミーティングの概要を表5に示す。

表5 エキスパートミーティングの概要

#### 【エキスパートミーティング】

##### 1. オリエンテーション

##### 2. 取り組み事例報告1「コロナ禍における入退院支援」

報告者：美濃市立美濃病院 在宅医療支援センター アドバンス研修修了者

##### 3. 取り組み事例報告2「コロナ禍における入退院支援～全盲で独居患者の退院支援の取り組み～」

報告者：岐阜 JA 厚生連 東濃中部医療センター 土岐市立総合病院 アドバンス研修修了者

##### 4. 参加者間の意見交換：コロナ禍での入退院支援の現状や取り組み等の意見交換

##### 5. 意見・感想の記入(Formsによるオンライン提出)、修了証交付

### (3) エキスパートミーティング参加者の意見・感想

研修会終了後に、感想・要望などエキスパートミーティングに対する意見を求めた。

本研修に対し、「他施設の取り組みや現状が聞ける場はないので、とても貴重な時間だった」「面会禁止の中、リモート面会やiPadの利用など全く行っていなかったので参考になった」「支援方法を工夫しなくてはいけないという思いが大きくなった」等、他施設の取組みから自施設の退院支援についてや自身の退院支援の取り組みについて考える機会となっていた。また、「入退院支援における病棟看護師の教育についてもっと皆さんの意見を伺いたかった」等、入退院支援に関する人材育成についての検討の意見もあった。

## 3. 「入退院支援教育プログラム(2022年度)」の成果把握のための質問紙調査

「入退院支援教育プログラム(2022年度)」の成果を把握するため、ベーシック研修、アドバンス研修、エキスパートミーティングに参加した看護職者を対象とする質問紙調査を実施した。質問紙は各研修終了後に郵送した。調査期間はベーシック研修は9月21日～10月31日、アドバンス研修は11月24日～12月23日、エキスパートミーティングは12月12日～1月13日とし、自由意思に基づく質問紙の回答・返送を依頼した。

なお、経験年数、所属部署の部分は単純集計し、自由記載の部分は、意味内容ごとの文脈に分けて要約し、質的に分類した。以下【 】は分類を示す。

## 1) ベーシック研修参加者を対象とした質問紙調査

### (1) ベーシック研修質問紙調査回答者の概要

ベーシック研修参加者 49 人を対象とした質問紙調査には、26 人から回答があった(回収率 53.1%)。経験年数としては、2 年以上 5 年未満は 3 (11.5%)、5 年以上 10 年未満は 5 人 (19.2%)、10 年以上 15 年未満は 2 人 (7.7%)、15 年以上 20 年未満は 6 人 (23.1%)、20 年以上 30 年未満は 6 人 (23.1%)、30 年以上は 4 人 (15.4%) であった。現在の所属施設(部署)は、「医療機関(病棟)」18 人 (64.3%)、「医療機関(外来)」2 人 (7.1%)、「医療機関(入退院支援担当部署)」6 人 (21.4%)、「訪問看護ステーション」1 人 (3.6%)、「その他(人工透析室)」1 人 (3.6%) であった。

### (2) ベーシック研修で一番学びが大きかったこと

ベーシック研修で一番学びが大きかったことの記述内容は以下の 14 に分類された。患者・家族への支援内容として【患者・家族の望む療養生活に向けた入退院支援の重要性を学ぶ】【入院前からの支援の重要性がわかる】があり、退院支援のプロセス、体制、役割に関して【入退院支援の意義・プロセス・重要な支援がわかる】【入退院支援の体系的取り組みを知る】【多様な視野での入退院支援の現状を知る】【入退院支援における看護師の役割を再認識する】があった。多職種との連携について【多職種連携の大切さを再認識する】、地域との連携については【地域の専門職に情報提供しつなぐ必要性がわかる】【多施設間の関係確立が入退院支援の質向上につながることを学ぶ】があった。グループ討議での学びでは【多施設の入退院支援の方法を知る】【コロナ禍での家族との関わり方の工夫を知る】【多施設の入退院支援の現状と課題を知る】【グループ討議による学びが大きい】【自施設の入退院支援の現状がわかる】があった。

表 6-1 ベーシック研修で一番学びが大きかったこと (n=26)

分類	要約 (一部抜粋)
患者・家族の望む療養生活に向けた入退院支援の重要性を学ぶ	入院患者・家族が退院後に望む生活の QOL を考慮した上で、入退院支援に関わる必要がある。
	患者が自分の病気や障害を理解し、退院後も必要な医療・看護を受けながら、自身の望む療養生活を実現するために、患者・家族の意向を踏まえ入退院支援をするということを学べた。
	意思決定支援の際に、本人・家族の思いを聴く前に、病状・介護力によりできないと考え、思いに沿った療養生活への支援ができていなかった。
入院前からの支援の重要性がわかる	(退院後の望む生活に向け) 環境を整えるためにも早期に関わっていくことが必要である。
	患者の入院前の状態(を把握し) 早期から関わっていくことの重要性がわかった。
入退院支援の意義・プロセス・重要な支援がわかる	入院時のスクリーニングとアセスメントが重要である。
	入退院支援の必要性・プロセス・多職種連携について学べた。
	入退院支援についての意義が学べた。
入退院支援の体系的取り組みを知る	退院支援が診療報酬改定により入退院支援となり、入院前から体系的に取り組まれるようになったことを知った。
	入退院支援に伴う様々な医療機関での取り組みを具体的に知ることができた。
	入院前からの病院での支援を学んだ。
多様な視野での入退院支援の現状を知る	ケアマネジャーや訪問看護師から話を聞いたことで、色々な視野で退院支援の現状を知ることができた。
	ICT の導入の必要性がわかった。
	在宅療養支援と社会資源の活用についてを学んだ。
入退院支援における看護師の役割を再認識する	入退院支援において看護師が行うべき役割が再認識できた。
	入退院支援部署の役割として、院内との協働、地域との調整等があるが、患者・家族の意思を尊重しながら、可能な限り納得のいく生活ができるように支援できるようにすることであると学んだ。
多職種連携の大切さを再認識する	退院支援に関わる病棟に配属となり、退院支援の基礎的な部分から知る必要があると感じており、多職種連携の大切さ、連携する際の看護師の役割が学べた。
	地域連携の大切さを学んだ。
	他職種連携の大切さ等も再確認できた。
	入院時から退院を見据えた関りをするために情報収集・共有し連携することが必要である。

表 6-1 ベーシック研修で一番学びが大きかったこと (n=26) つづき

分類	要約 (一部抜粋)
地域の専門職に情報提供し つなぐ必要性がわかる	在宅サービスへ情報提供して、しっかりつないでいく必要がある。 多職種連携をしているつもりであったが、ほとんどがケアマネジャーを通しての連携であった。
多施設間の関係確立が入退院 支援の質向上につながることを 学ぶ	病院、行政、訪問看護、各種介護施設間の顔の見える関係の確立が退院支援の 向上につながることを事例を通して学んだ。
多施設の入退院支援の方法を 知る	グループワークで病院によって介入方法がちがうと学んだ。 他の病院の調整等聞いたことがよかった。 今のコロナ禍での他施設での退院支援の方法を知ることができた。
コロナ禍での家族との関わり 方の工夫を知る	コロナ禍で家族と関わる機会が少ない中での、各病院の様々な関わり方を知っ た。 グループワークで他病院の入退院支援担当者と交流し、面会制限のある中での 家族との関わり方の工夫を学ぶことができた。
多施設の入退院支援の現状と 課題を知る	高齢社会により多くの人が同様な課題を抱えていることも知った。 グループ討議において、県内施設の退院支援の現状と課題が情報共有できた。 他病院の退院支援の現状を知ることができた。
グループ討議による学びが 大きい	他病院の人との交流により色々な気づきがあった。 様々な病院の異なる立場の看護師らとのグループワークでの学びが大きかつ た。
自施設の入退院支援の現状が わかる	自病院の入退院支援の現状がわかった。

## (3) 学びを踏まえて利用者ニーズ基盤とした入退院支援に必要だと考えたこと

ベーシック研修の学びを踏まえて利用者ニーズ基盤とした入退院支援に必要だと考えたことの記述内容は以下の 16 に分類された。患者・家族の望む生活に向け必要なこととして、【患者・家族の意思を尊重した意思決定支援をする】【患者・家族の望む生活の実現に向け支援体制を整える】【入院早期から退院後の療養生活を見据えて支援する】【入院前の外来から話を聴き支援する窓口を設ける】があった。特に患者への支援では【患者主体とした支援を行う】【患者の意欲を高める】があり、患者・家族に対しては【患者・家族の包括的アセスメントを行う】【患者・家族との信頼関係を築く】【家族との情報共有の方法を工夫し利用者ニーズを捉えた支援をする】【社会資源を理解して提案する】があった。多職種連携に関しては【入院時からの統一した退院支援に向けた情報共有の方法を検討する】【多職種と情報共有し連携して支援する】があり、さらに【退院前カンファレンスを開催し多職種間で密に情報交換する】【地域の専門職に情報提供して連携する】【その人らしさを大切にして連携する】もあった。また看護師の人材育成に関する【同じレベルで支援するための人材育成が必要である】があった。

表 6-2 学びを踏まえて利用者ニーズ基盤とした入退院支援に必要だと考えたこと (n=26)

分類	要約 (一部抜粋)
患者・家族の意思を尊重した意思 決定支援をする	患者・家族の意思・意向を尊重した支援が必要である。 利用者の意思決定を聞き入れ、尊重する。 患者・家族の意思決定が一番大切であるが、病院のベッドコントロールの 事もあるため、病院内外における交渉が大切である。
患者・家族の望む生活の実現に 向け支援体制を整える	退院に向け、どの方向性での退院を希望しているかを早く知り、それに合 わせた対応ができるよう、家族との面談に力を入れるとよい。 利用者がどのような生活を望んでいるのかを聴き、その生活実現のための 問題点、アプローチ方法を多職種で共有・協働し、地域の専門職とも連携 して支援する。 自宅環境を整え、誰が支援できるか等ハード面、ソフト面を考えなければ ならない。
入院早期から退院後の療養生活 を見据えて支援する	入院早期より退院後の生活を見据え在宅で過ごすことができるように関わ る。 入院前から早期に関わる事、患者・家族の気持ち・考えを把握して調整す ること、在宅サービスに情報提供し繋いでいくことを実施する。

表 6-2 学びを踏まえて利用者ニーズ基盤とした入退院支援に必要なと考えたこと (n=26) つづき

分類	要約 (一部抜粋)
入院早期から退院後の療養生活を見据えて支援する (つづき)	退院調整看護師や MSW に頼るだけではなく、病棟看護師自身が、入院時から退院後の生活をイメージし、特に医師との情報共有や (多職種との) 連携を図ることが必要である。
入院前の外来から話を聴き支援する窓口を設ける	外来で関わった時から話を聴き支援する窓口を設けていきたい。そうすることで加算もとれ、病院としての利益も生まれる。
患者主体とした支援を行う	現状はどうしても家族主体になっているが、患者主体とした退院支援が必要である。
患者の意欲を高める	本人の意欲を高める精神的サポートが必要である。
患者・家族の包括的アセスメントを行う	患者の情報収集 (患者家族を含め)、アセスメントが必要である。 患者・家族の細やかな身体的状況・家庭環境などの情報収集を行う。
患者・家族との信頼関係を築く	本人・家族との関わる機会を多くとるようにし、信頼関係を築いていくよう努める事が大切である。
家族との情報共有の方法を工夫し利用者ニーズを捉えた支援をする	コロナ禍の面会制限により家族が本人の状態を把握できないことが多いため、面会の機会を設け、電話で ADL の状態など伝え、情報共有した上で、利用者ニーズをとらえ支援することが必要である。 家族が安心して在宅に迎えることができるよう介入が必要である。 利用者ニーズと現状の ADL を把握し、患者・家族と密な関わりをする。現状では困難であるため対面以外で情報共有ができる方法を模索する。
社会資源を理解して提案する	社会資源を本人・家族が決められるようにし、利用を有効にする。知識がないと提案できない。 地域の社会資源を理解する必要がある。
入院時からの統一した退院支援に向けた情報共有の方法を検討する	入院時から統一した退院支援ができるような情報共有の方法 (の検討) が必要である。
多職種と情報交換し連携して支援する	多職種との情報交換を密に行い、連携を強化する。 多職種で情報の共有・方向性の決定が必要である。 入院時に情報収集し、それをもとに多職種と連携することが必要である。
退院前カンファレンスを開催し多職種間で密に情報交換する	退院前カンファレンスを多職種と密に行い、患者・家族の思いを大切にしたい連携が必要である。 退院前カンファレンスの計画や、入院中よりケアマネや介護施設の職員、訪問看護師との密な情報交換も大切である。
地域の専門職に情報提供して連携する	訪問看護として自施設への入院の際は情報提供を行なっている。入院報告や情報提供はケアマネジャーから行っているが、訪問看護としての情報も共有できるとよい。 地域の専門職との連携が必要である。 地域の関係者が求める情報提供を行うことが必要である。
その人らしさを大切にして連携する	その人らしさを大切にした連携を行うことが必要である。
同じレベルで支援するための人材育成が必要である	スキルの違うスタッフへの教育が必要である。 人材の育成が必要である。 どのスタッフでも同じレベルの支援をするための人材育成が必要である。

#### (4) 本研修で期待したことで学べたこと

ベーシック研修で期待したことで学べたことの記述内容は以下の 13 に分類された。入退院支援の考え方・知識に関して【多様な立場での入退院支援の考えを聴き支援への示唆を得る】【入退院支援に必要な基礎的知識を学ぶ】【入退院支援における看護師の役割を学ぶ】【入退院支援のプロセスを学ぶ】があった。具体的な支援方法として【患者・家族の意思を尊重した支援について学ぶ】【入院前からの支援の具体的方法を学ぶ】があり、さらに連携に関する【地域連携の重要性と連携方法・役割を学ぶ】があった。グループ討議による学びとして【多施設の入退院支援の現状・課題を知る】【多施設の現状を知り自施設の課題を再認識する】【多施設の現状・課題の共有から新たな知見を得る】があった。一方学びたかったこととして【実践的な話が聞きたかった】【退院支援看護師間の意見交換ができるとよい】【回復期病棟の入退院支援】があった。

表 6-3 本研修で期待したことで学べたこと (n=26)

分類	要約（一部抜粋）
多様な立場での入退院支援の考えを聴き支援への示唆を得る	各立場からの具体的で専門性の高い講義を聞くことができてよかった。 病棟、外来、退院支援部署など様々な立場からの入退院支援の考えを聞くことができて、自分の院内での協働に役立てることができる。 多様な意見から、入退院支援で一番大切なことだと思うことを学ぶことができた。
入退院支援に必要な基礎的知識を学ぶ	介護保険のしくみや制度の知識をもっと学びたかったので勉強になった。 退院支援看護師として知識不足があったが様々な職種からの講義で知識の向上に繋がった。 入退院支援の基礎を学ぶことを期待しており、学ぶことができたと思う。
入退院支援における看護師の役割を学ぶ	入退院支援の基本的知識と担当看護師の役割を学ぶことができた。 退院支援での訪問看護の役割が学べた。
入退院支援のプロセスを学ぶ	訪問診療看護師として退院調整会議の参加、主幹病院からの転院を主に行っている。退院支援に向けて入院から退院までのプロセスを学べた。 断片的に行っている内容が、一連の流れとして学ぶことができ、今後の業務に役立てていきたい。
患者・家族の意思を尊重した支援について学ぶ	本人の意思ではなく周りの意見で支援が決まってしまうことが多いと反省した。 本人・家族からの情報収集内容についての疑問を感じていたが学ぶことができた。 入院期間の制限のある中で置き去りにになっている患者・家族の本当の思いを引き出して退院後の生活を決定し、満足した療養生活を送ることができる支援について、研修を受けて前進できた。
入院前からの支援の具体的方法を学ぶ	何年も課題に感じていた入院前からの退院支援の具体的方法が診療報酬も含めて学ぶことができた。
地域連携の重要性と連携方法・役割を学ぶ	医療・介護・地域との関連、連携の仕方と内容・手順や役割についても理解できた。 地域連携の重要性と社会資源について学ぶことができた。
多施設の入退院支援の現状・課題を知る	県内の（入退院支援の）現状と問題点や他の病院での取り組みをグループワークで知ることができた。 グループワークで他病院での退院支援について知ることができ参考になった。
多施設の現状を知り自施設の課題を再認識する	自施設の課題が見え、少しずつ改善していきたいと思った。 他病院や地域の専門職の姿を学ぶことで自病院での今後の取り組みについて考えることができた。 自施設の（入退院支援）の振り返りと多施設の現状を知ることができ、今後の課題を再確認できた。
多施設の現状・課題の共有から新たな知見を得る	他施設の退院支援の現状や課題を共有することで、今後の退院支援に関する知識を深めることができた。 コロナ禍で家族と直接カンファレンスが出来ない中での退院の方向性（検討）の他施設の対策が分かり、大変学びとなった。
実践的な話が聞きたかった	もっと実践的な話が聞きたかった。
退院支援看護師間の意見交換ができるとよい	退院支援看護師として業務をしている方とのグループワークや意見交換ができればよかった。
回復期病棟の入退院支援	回復期病棟の入退院支援。

## 2) アドバンス研修修了者への質問紙調査結果

### (1) アドバンス研修質問紙調査回答者の概要

アドバンス研修参加者 8 人を対象とした質問紙調査には、6 人から回答があった（回収率 75.0%）。経験年数としては、20 年以上 30 年未満は 5 人（83.3%）、30 年以上は 1 人（16.7%）であった。現在の所属施設（部署）は、「医療機関（病棟）」6 人（100%）であった。

### (2) アドバンス研修で一番学びが大きかったこと

アドバンス研修で一番学びが大きかったことの記述内容は、【コロナ禍での退院支援の工夫と実践を知ることができた】【患者の思いを捉えた意思決定支援】【事例検討により支援能力の向上につながっ



た】【地域で支援する訪問看護師の視点が参考になった】【ファシリテートを学ぶことができた】【他施設でも自施設と同様な課題があることがわかった】の6つに分類された（表7-1）。

表7-1 アドバンス研修で一番学びが大きかったこと（n=6）

分類	要約
コロナ禍での退院支援の工夫と実践を知ることができた	退院前後訪問を実践している病院の状況を知ることが出来た コロナ禍で退院支援を実践するために、指導の場の工夫や患者・家族へ分かりやすい配慮がされていたことを知ることが出来た
患者の思いを捉えた意思決定支援	終末期における意思決定が困難な状況の患者に対し、入院前の情報を大切にして患者の思いを汲み取り、患者の意向に添えるよう支援する 意志決定をするうえで患者とのコミュニケーションが大切であること、家族との気持ちのすり合わせをしていく必要があること
事例検討により支援能力の向上につながった	事例を考えることで、支援の方向性の幅が広がった 事例検討を行う事で、振り返りにより支援能力が向上できた
地域で支援する訪問看護師の視点が参考になった	地域で支援をする訪問看護師の視点でのアドバイザーからの意見が参考になった
ファシリテートを学ぶことができた	自身は上手くできなかったが、他の参加者のファシリテートをみて学ぶことができた
他施設でも自施設と同様な課題があることがわかった	他施設でも自施設と同様な課題があることがわかった

### （3）学びを踏まえて利用者ニーズ基盤とした入退院支援に必要だと考えたこと

アドバンス研修の学びを踏まえて利用者ニーズ基盤とした入退院支援に必要だと考えたことの記述内容は、【患者と家族の思いや希望を捉え、それを活かした援助をする】【意思決定での患者・家族の戸惑いに対して支援する】【疾患と共にある生活を患者と考える】【制度に関する知識、連携スキル、マネジメント力を養う】【入院前後から多職種で連携する】の5つに分類された（表7-2）。

表7-2 学びを踏まえて利用者ニーズ基盤とした入退院支援に必要だと考えたこと（n=6）

分類	要約（一部抜粋）
患者と家族の思いや希望を捉え、それを活かした援助をする	患者や家族の思いや希望を尊重したうえで、最善の方法や助言を行い、支援していく 本人・家族それぞれの思いを捉えることと、それを活かした援助の考案が大切となる 患者・家族の思いを捉え、社会資源を含む多職種で情報交換し、目標を共有し、退院調整や指導を行う
意思決定での患者・家族の戸惑いに対して支援する	医療者が必要と考える支援や意思決定の場面での患者・家族の戸惑いに対して支援していく必要がある
疾患と共にある生活を患者と考える	疾患と共に生活を営むことが出来るよう一緒に考えていく
制度に関する知識、連携スキル、マネジメント力を養う	変化していく制度に関する知識を学び、連携のスキルやマネジメント力を養う
入院前後から多職種で連携する	入院前後から継続した看護がされるよう、他職種への情報伝達が重要となる 多職種との連携

### （4）利用者ニーズを基盤とした入退院支援を自施設で実現するための入退院支援体制の構築

利用者ニーズを基盤とした入退院支援を自施設で実現するための入退院支援体制の構築について考えたことの記述内容は、【病棟のチームで患者の支援について話し合う】【多職種で情報を交換し連携する】【地域の支援者と連携して看護を継続できるようにする】【退院支援の研修・学習を充実させる】の4つに分類された（表7-3）。

表7-3 利用者ニーズを基盤とした入退院支援を自施設で実現するための入退院支援体制の構築（n=6）

分類	要約
病棟のチームで患者の支援について話し合う	受け持ち1人で抱えることがないよう、カンファレンスで相談・検討できるようにする 病棟でチームで患者についての入退院支援を話し合う
多職種で情報を交換し連携する	プライマリではないため患者にゆっくり話す時間がとれない現状があるが、各職種間のカンファレンスはできているので、多くのスタッフにわかるよう情報交換する 多職種と連携し取り組む

表 7-3 利用者ニーズを基盤とした入退院支援を自施設で実現するための入退院支援体制の構築 (n=6) つづき

分類	要約 (一部抜粋)
地域の支援者と連携して看護を継続できるようにする	地域の医療・介護支援者と連携をとり、在宅での生活が継続できるよう入院前の情報や退院時の看護サマリ、カンファレンスなどの情報を大切にする
	入院中にすべてを指導できなくても、次に繋げ継続看護が行えることを目指す
退院支援の研修・学習を充実させる	ラダー受講者への退院支援の研修だけでは不十分であるので、院内研修の充実を図りたい
	多職種間での共同学習ができれば良い

(5) 本研修で期待したことで学べたこと

本研修で期待したことで学べたことの記述内容は、【意思決定支援の現状と実際を知ることができた】【患者・家族との関わり方や支援方法が見出せた】【スタッフへの支援として、カンファレンスによる検討、幅広い視点でのアドバイス、継続看護の考え方の必要性が学べた】【他施設での退院支援の現状と取り組みを知ることができた】の4つに分類された(表7-4)。

表 7-4 本研修で期待したことで学べたこと (n=5)

分類	要約
意思決定支援の現状と実際を知ることができた	事例を通して、意思決定支援の困難さも実感したが、どの医療機関も意思決定を大切にしたい支援がされていた
	退院前後訪問については実践されている病院は少なかったが、実施されている施設では、スタッフの中でケアの1つとして確立されていることがすばらしいと思った
患者・家族との関わり方や支援方法が見出せた	事例検討により、客観的な視点が持て、解決策の偏りや打開策を見出せた
	事例を通して患者・家族との関わり方など知ることが出来た
スタッフへの支援として、カンファレンスによる検討、幅広い視点でのアドバイス、継続看護の考え方の必要性が学べた	スタッフが困難事例に支援できるよう指導する方法を学びたいと思い参加した。1人で抱えずカンファレンスでの検討、方向性の幅を広げられるようなアドバイス、継続看護として次へ繋げる援助の必要性が学べた
他施設での退院支援の現状と取り組みを知ることができた	他院での退院支援の現状と退院支援に必要なこと
	他施設での退院支援の具体的な現状を知ることができた
退院支援のシステムと教育の実際が知りたい	退院支援をすすめていくシステムと教育について知ることができたらよかった

### 3) エキスパートミーティング参加者への質問紙調査結果

#### (1) エキスパートミーティング質問紙調査回答者の概要

エキスパートミーティング参加者10人を対象とした質問紙調査には、8人から回答があった(回収率80.0%)。経験年数としては、10年以上15年未満は1人(12.5%)、15年以上20年未満は1人(12.5%)、20年以上30年未満は4人(50%)、30年以上は2人(25%)であった。現在の所属施設(部署)は、「医療機関(病棟)」3人(37.5%)、「医療機関(入退院支援担当部署)」4人(50.0%)、「その他(介護老人保健施設)」1人(12.5%)であった。

#### (2) エキスパートミーティングで一番学びが大きかったこと

エキスパートミーティングで一番学びが大きかったことの記述内容は、【コロナ禍でもその人らしさを大切に退院支援の取り組みを行っている現状を知った】【退院支援の具体的な支援方法と工夫がわかった】【老人保健施設での退院支援の取り組みを知った】【入退院支援における病棟看護師の育成方法のヒントを得た】【やりがいを感じられた】の5つに分類された(表8-1)。

表 8-1 エキスパートミーティングで一番学びが大きかったこと (n=8)

分類	要約 (一部抜粋)
コロナ禍でもその人らしさを大切に退院支援の取り組みを行っている現状を知った	コロナ禍でも退院支援を止めずに他院でも様々な取り組みが行われていることが分かった
	コロナの中その人らしくを考えてそれぞれでできることを行い、退院支援を行っていることを聞き、大変だけど頑張ろうという気持ちをもてた

表 8-1 エキスパートミーティングで一番学びが大きかったこと (n=8) つづき

分類	要約
退院支援の具体的な支援方法と工夫がわかった	退院後電話で状態を確認し行った支援について評価、振り返りを行った
	他施設がコロナ禍で、どのように患者の状態を家族等に伝えられているかわかった
	他施設でも面会制限や教育という同じ悩みを抱えていることが分かった。情報交換することで刺激を受けたり、参考になることが多かった
老人保健施設での退院支援の取り組みを知った	老人保健施設でも医療枠があり退院支援に取り組んでいることを初めて知った
	高齢者施設での関わりの状況を知った
入退院支援における病棟看護師の育成方法のヒントを得た	入退院支援における病棟看護師の育成方法のヒントを得た
やりがいを感じられた	専門で活躍されている方のやりがいを肌で感じる事ができた

(3) 学びを踏まえて利用者ニーズ基盤とした入退院支援に必要だと考えたこと

エキスパートミーティングの学びを踏まえて利用者ニーズ基盤とした入退院支援に必要だと考えたことの記述内容は、【患者・家族の思いを捉える機会をつくりコミュニケーション能力を高める】【患者の思いに沿った自宅退院について理解と知識を深める】【意思決定支援のしくみを作る】【入院前から今後を見据えた関わりをする】【すべての医療機関で対象の地域での生活が支えられるように意識改革する】【部門・診療科ごとに意見交換ができる場を持ち問題解決に結び付ける】【その他】の7つに分類された(表8-2)。

表 8-2 学びを踏まえて利用者ニーズ基盤とした入退院支援に必要だと考えたこと (n=8)

分類	要約
患者・家族の思いを捉える機会をつくりコミュニケーション能力を高める	患者の気持ちに寄り添った支援のために、患者の思いを捉え、家族と合意形成を図る
	患者や家族の話に耳を傾け、知ることがとても大切
	想いを聞くこと、聞こうとする病院側の姿勢とコミュニケーション能力が必要であり、オンライン面会の活用や、教育が必要である
患者の思いに沿った自宅退院について理解と知識を深める	自宅に帰りたい患者の思いに共感し、自宅退院の意義を理解してもらう
	在宅退院への取り組みのためには、看護師が知識を習得していく
意思決定支援のしくみを作る	いつ誰が誰にどのようなことをふまえて話を聞き、方向性を出すのか、意思決定支援のしくみを作る
入院前から今後を見据えた関わりをする	入院前の調整から今後を見据えてスタッフが同じ方向に関わりが持てると良い
すべての医療機関で対象の地域での生活が支えられるように意識改革する	すべての医療機関で対象の地域での生活が支えられるように意識改革する
部門・診療科ごとに意見交換ができる場を持ち問題解決に結び付ける	部門や、診療科ごとに意見交換ができる場があると、共通の問題点が抽出できて解決に結びつく
その他	連携
	気づき

(4) 地域包括ケアシステムの中で利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けて、今後取り組みたいこと

地域包括ケアシステムの中で利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けて取り組みたいことについて考えたことの記述内容は、【退院後訪問・退院前訪問・試験外泊・外出の再開を働きかけたい】【オンライン面会や動画・写真を活用した情報提供などの病院内のシステムづくり】【実践の中での多職種連携を強化し振り返りを行う】【病棟看護師が退院後の生活への理解を深められるよう訪問看護同行訪問や振り返りカンファレンスなどを行う】【自宅退院が可能であることの認識を看護師が持てるようにする】【患者の思いに寄り添った退院支援】の6つに分類された(表8-3)。

表 8-3 地域包括ケアシステムの中で利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けて今後取り組みたいこと (n=8)

分類	要約（一部抜粋）
退院後訪問・退院前訪問・試験外泊・外出の再開を働きかけたい	コロナ禍で控えていた退院前訪問、退院後訪問を再開したい 退院後訪問、退院前訪問、試験外泊、外出をコロナの状況に合わせて実施できるように働きかけたい
オンライン面会や動画・写真を活用した情報提供等の病院内のシステムづくり	オンライン面会や動画・写真を活用した情報提供などの病院内のシステムづくり
実践の中での多職種連携を強化し振り返りを行う	実践の中で多職種連携を行い、それを振り返ることで、次に活かすことができる 他職種との連携を強化して退院支援の質向上に取り組む
病棟看護師が退院後の生活への理解を深められるよう訪問看護同行訪問や振り返りカンファレンスなどを行う	訪問看護の同行実習など再開し、病棟看護師の在宅への理解を深めたい 退院後のフォローアップとしての電話相談などの退院支援の振り返りカンファを行い、患者の退院後の生活をフィードバックする 退院支援の学習やチームカンファレンスを開催する
自宅退院が可能であることの認識を看護師が持てるようにする	療養病棟において、1度入院されれば一生入院という概念を変える。自宅退院した患者の受け持ち看護師の思いを他の看護師に伝えるようにする 病院は治療の場であり生活の場ではない事を発信しつづけ、意識改革を行っていきたい
患者の思いに寄り添った退院支援	患者の思いに寄り添った退院支援

#### (5) 本研修で期待したことで学べたこと

本研修で期待したことで学べたことの記述内容は、【他施設のコロナ禍に対応した取り組みを知ることができ参考にした】【退院困難と思われる事例も退院できるとわかった】【自身の取り組みに自信が持てた】【スタッフへの教育について考えた】【時間に限りがあり、質問や情報提供できなかった】【高齢者施設や訪問看護の看護職の受講者が増える」とよい】の6つに分類された。(表 8-4)。

表 8-4 本研修で期待したことで学べたこと (n=8)

分類	要約（一部抜粋）
他施設のコロナ禍に対応した取り組みを知ることができ参考にした	他施設の支援の実際を聞くことで取り入れられる具体策がないか考えられた。リモート会議や iPad 利用、意向確認の方法について考えて具体的に進めていきたい コロナ禍での支援方法を今後の参考にさせて顶きたい 他施設の取り組みや意見交換でから取り入れられることがあればと思い参加した。オンライン面会の他施設の方法がきけてよかった
退院困難と思われる事例も退院できるとわかった	退院困難と思われる事例でも、退院支援への知識や経験、やりがいを持ったスタッフがいれば、退院させることができるとわかった
自身の取り組みに自信が持てた	自分の悩みを聞いてもらえて取り組みに自信が持てた
スタッフへの教育について考えた	スタッフの教育の面で色々な取り組みやアドバイスを頂けた 少しずつ興味を持っている人に関わりが持てると良い
時間に限りがあり、質問や情報提供できなかった	時間に限りがあり質問や情報提供できなかった
高齢者施設や訪問看護の看護職の受講者が増える」とよい	高齢者施設や訪問看護の看護職の受講者が増える」とよい

## V. 考察

質問紙調査の結果を踏まえ、「利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援」の成果を把握する。

### 1. 入退院支援教育プログラム研修の成果

#### 1) 入退院支援の意義・支援方法についての学び

質問紙調査結果より研修参加による学びが把握できた。ベーシック研修においては、入退院支援の意義やプロセス等の基本的知識を学び、【患者・家族の望む療養生活に向けた入退院支援の重要性を学ぶ】ことができており、多様な場面で入退院支援に関わる講師の講義により、【多様な立場での入退院支援の考えを聴き支援への示唆を得る】ことができ、今後入退院支援を広い視野で考える契機となっていた。アドバンス研修修了者からは、事例検討により【意思決定支援の現状と実際を知ることができた】【患者・家族との関わり方や支援方法が見出せた】との学びが示され、今後の患者・家族の意思を

尊重した意思決定支援に生かすことができると考える。

また、グループ討議や事例検討等により、多施設の看護職者と意見交換できたことによる学びが示された。ベーシック研修でのグループ討議による学びでは、【多施設の入退院支援の方法を知る】【多施設の入退院支援の現状と課題を知る】ことにより自施設の入退院支援の現状を振り返る機会となり、課題が再認識できたことがわかった。アドバンス研修修了者も事例検討により【コロナ禍での退院支援の工夫と実践を知ることができた】【他施設でも自施設と同様な課題があることがわかった】ことが示された。エキスパートミーティング修了者からも【コロナ禍でもその人らしさを大切に退院支援の取り組みを行っている現状を知った】と示され、多施設のコロナ禍における入退院支援の質を保持するための工夫を知ること、自施設の入退院支援の実践への示唆が得られたことが伺えた。

本質問紙調査において、研修に参加して一番学びが大きかったことと、本研修に期待したこととで学べたことはほぼ同じ内容になっており、参加者のニーズに合わせた研修内容になっていたと考える。一方では【退院調整看護師間の意見交換ができるとよい】等の要望があった。また【実践的な話が聞きたかった】【退院支援のシステムと教育の実践が知りたい】との教育内容に関する要望もあった。【高齢者施設や訪問看護の看護職の受講者が増えるとうい】との提案があり、地域包括ケアシステムの中での多職種連携の充実に向け、研修参加者募集の方法の検討も必要であると考えた。

## 2) 利用者ニーズを基盤とした入退院支援に必要であると考えたこと

全ての研修修了者が、患者・家族の思いや希望を尊重した支援が必要と捉えていた。ベーシック研修修了者の利用者のニーズを捉える具体的方法としては、【患者・家族の包括的アセスメントを行う】【患者主体とした支援を行う】【患者・家族との信頼関係を築く】等が示されており、利用者のニーズを捉えることの必要性を再認識したうえで、ニーズを捉える支援方法が考えられていた。

アドバンス研修修了者からは【意思決定での患者・家族の戸惑いに対して支援する】ことが必要と示され、複数回にわたる意思決定支援の必要性を認識し、【疾患と共にある生活を患者と考える】等の具体的な支援方法も考えられていた。

利用者のニーズを捉え、応えるために看護職者に求められる事として、アドバンス研修修了者からは【制度に関する知識、連携スキル、マネジメント力を養う】こと、エキスパートミーティング修了者からは【患者・家族の思いを捉える機会をつくりコミュニケーション能力を高める】【患者の思いに沿った自宅退院について理解と知識を深める】【意思決定支援のしくみを作る】ことが提示されていた。したがって、利用者ニーズを基盤とした入退院支援を実践するためには、患者・家族のニーズを捉え、個々人の意思決定に沿った療養生活が送れるような支援を創出し、実践できる入退院支援の実践能力を高める必要があることが示唆された。

## 3) 入退院支援の質向上に向けた体制の構築についての学び

入退院支援の質向上に向けた体制を構築するために、ベーシック研修修了者は、多職種との連携について【多職種連携の大切さを再認識する】【地域連携の重要性と連携方法・役割を学ぶ】ことにより、【地域の専門職に情報提供して連携する】ことが必要であると捉えていた。アドバンス研修修了者は【病棟のチームで患者の支援について話し合う】ことが必要と捉え、【多職種で情報を交換し連携する】ことや、【地域の支援者と連携して看護を継続できるようにする】ことの必要性も示されていた。エキスパートミーティング修了者からは、【部門・診療科ごとに意見交換ができる場を持ち問題解決に結び付ける】ことが示され、院内・地域の多職種との連携・協働の重要性を理解したうえで、協働するために共に検討できる体制を構築する必要性も示唆された。

## 4) 入退院支援の質向上に向けた看護職者の人材育成の必要性

入退院支援の質向上のためには、自施設・自部署の看護職者の入退院支援に対する知識・意識の向上が必要である。ベーシック研修修了者からは【同じレベルで支援するための人材育成が必要である】と示されていたが、アドバンス研修修了者からは【退院支援の研修・学習を充実させる】ことの必要性と、具体的に【スタッフへの支援として、カンファレンスによる検討、幅広い視点でのアドバイス、継続看護の考え方の必要性が学べた】ことが示されていた。

エキスパートミーティング修了者からは、まず患者・家族の地域での生活を理解するための【すべての医療機関で対象の地域での生活が支えられるように意識改革する】ことが提示されていた。

看護職者の人材育成の必要性は認識されており、研修に参加することでより具体的な教育支援方法への示唆が得られていたと考える。

## 2. 入退院支援における人材育成の方策

入退院支援においては、利用者ニーズを捉えることができ、自部署・自施設の利用者ニーズを基盤とした入退院支援の課題を明確にし、課題解決に向けた取り組みを多職種で連携しながら考案・実践し、実践を振り返り改善ができる人材の育成が必要であると考えた。本研修での学びや考え方の把握から、本研修参加を契機としてベーシック研修参加者は、利用者ニーズを基盤とした入退院支援の重要性を学んでいた。そして自部署の入退院支援の課題を明確にし、課題解決に向け多様な支援を考え、

実践し振り返ることを繰り返しながら、アドバンス研修、エキスパートミーティングと、系統だった当該入退院支援教育プログラムに沿って段階を踏んで学修することで、利用者ニーズを基盤とした入退院支援の本質についてより深く考えられるようになる。そして、中核となって入退院支援体制を整備し、看護職者への教育支援が実施できるようになる。したがって、「入退院支援教育プログラム」の施行は、医療機関で中核となって取り組める能力を育成できると考え、入退院支援における人材育成の方策として、入退院支援の質向上に寄与できていると考える。

## **VI. 教員の自己点検評価**

### **1. 看護実践の場を与えた影響**

本事業では入院前から利用者ニーズに対応した入退院支援が実践できるように、看護職者の知識・意識の向上、および中核となって自部署の入退院支援の課題解決に取り組める人材育成に焦点をおき、「入退院支援教育プログラム」を施行している。本年度は、ベーシック研修、アドバンス研修及びアドバンス研修修了者を対象としたエキスパートミーティングを含む「退院支援教育プログラム（2022年度）」を施行した。ベーシック研修修了者は49名、アドバンス研修修了者は8名、エキスパートミーティング参加者は10名であった。これまでの10年間の研修修了者の総数として、ベーシック研修修了者は682名、フォローアップ研修修了者は294名、アドバンス研修修了者は85名、エキスパートミーティング参加者は28名となり、総修了者数は1089名となった。エキスパートミーティングでの取り組み事例からも、本事業の修了者が中核となり医療機関の入退院支援の質向上に取り組むことが、県内の医療機関の入退院支援の質向上に寄与していることが明確となった。

### **2. 本学の教育・研究に与えた影響**

教育への影響では、大学院看護学研究科博士前期課程の「地域基礎看護学演習Ⅱ」、「クロニックケア政策論」の授業の際に、本看護研究実践指導事業の報告書を提示し、県内全体の入退院支援の質向上を目指した教育支援の現状を説明したうえで、入退院支援の現状と課題、革新の方策について学生と討議した。また研修参加者の所属施設には本学の実習施設も多数含まれており、研修修了者が自施設で利用者ニーズを基盤とした入退院支援に取り組むことにより、学生は患者・家族の意思を尊重した入退院支援の重要性を学ぶことができる。

## **VII. 今後の課題、発展の方向性**

ベーシック研修修了者は、多職種の講師からの講義により、入退院支援の基本的な知識を得ると同時に、利用者ニーズを基盤とした入退院支援の重要性を再認識する機会になっていた。またグループ討議で多施設の入退院支援の現状と課題を知り、改めて自施設の課題を明確にすることができていた。今後は、多職種と協働しながら課題解決に向け取り組むことが期待できる。

アドバンス研修修了者は、自身の退院支援の充実に向け取り組むとともに、自施設の入退院支援の課題を客観的に捉え、スタッフが患者を生活者と捉えるための方策や、院内・地域の多職種との協働も含めた入退院支援体制構築に向けた具体的な取り組みについて考えることができており、今後も自部署の入退院支援の充実に向けて中核となって取り組むことが期待できると考える。

エキスパートミーティングは、アドバンス研修修了者の自部署での入退院支援の質向上に向けた取り組みを共有し、新たな知見を得て今後の自施設の入退院支援のシステムの充実や人材育成について考える機会となっていた。今後も県全体の入退院支援の質向上に向けて検討する貴重な機会として、参加者を増やしていきたいと考える。

次年度はフォローアップ研修を取り入れ、アドバンス研修、エキスパートミーティングを開催したいと考えるが、新型コロナウイルス感染症の拡大状況によって研修内容を検討する。また本年度の質問紙調査の成果を踏まえて研修内容を再検討し、「入退院支援教育プログラム（2023年度）」を開催する。開催方法としては、対面研修が望ましいが、はオンライン研修も視野に入れ、入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援を推進する。

今後も本事業での看護職者への教育支援が、県内全体の入退院支援の質向上に向けた看護職者の人材育成として貢献できるよう、県健康福祉部医療福祉連携推進課と協働で、本事業の取り組みを推進していきたいと考える。

## **Ⅱ．研修別報告**

### **2．専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会**





## 専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会

キーワード： 高度実践看護師 専門看護師 役割発揮 専門看護師の継続教育

### I. はじめに

本学は、平成 21 年度より大学院に専門看護師コースを設け、慢性看護、小児看護、がん看護の 3 分野の専門看護師を養成してきた。専門看護師は、当該専門領域において、卓越した看護の実践、看護職に対する教育、ケア提供者へのコンサルテーション、関係者の調整、実践の場での研究、倫理的調整などの諸活動が遂行できる実践能力をもち、看護現場においてさらなる活動の発展が期待されている。本学では、令和 3 年度までに 22 名の専門看護師が認定され、県内をはじめとする医療機関等に送り出してきた。内訳は、慢性看護 8 名、小児看護 3 名、がん看護 11 名である。また令和 3 年 12 月現在、岐阜県では本学修了者を含め 7 分野 39 名の専門看護師が活動している（日本看護協会 HP）。

日本看護協会では、専門看護師のレベル保持のため認定更新制を施行し、認定を受けてから 5 年ごとに更新審査を受けなければならないと示している。各分野において看護のリーダーとして活動する専門看護師は、看護実践の質向上の努力をし、自己の看護実践能力のレベルを維持向上させていかなければならない。更新審査では、「研修」と「研究」の両分野での一定数の活動実績が必要とされる。「研修」では「専門看護分野に関する最新の情報・知識・技術の修得のための研修プログラムへの参加」「専門看護師事例検討会等の専門看護師および専門看護師教育課程修了者を対象とした研修プログラムへの参加」が推奨されており、資格更新の条件として、研修を積むことが必須である。

本学では、平成 28 年度に県内で活動する専門看護師を対象に活動状況と研修のニーズについて調査を実施した。調査結果を基に、以降は先駆的な活動をしている専門看護師の講演、県内で活動する専門看護師による事例検討会等を開催し、COVID-19 の感染拡大により 1 年間研修会休止の後、令和 2 年度からオンラインを活用し、専門分野を超えた研修会企画として「COVID-19 感染流行下の専門看護師の活動状況の報告会」と新たに「意見交換や専門看護師資格 5 年目更新に向けた研修会」を開始し、参加者から好評を得ている。

そこで、令和 4 年度も「専門看護師資格 5 年目更新審査受審に向けた研修会」を継続するとともに、専門分野を超えた交流会機会として「CNS の役割開発—語ってつかもう！専門看護師の技—」を企画した。

### II. 担当者

奥村美奈子（看護研究センター）  
布施恵子 船橋真子（成熟期看護学領域）  
藤澤まこと 加藤由香里 柴田万智子（地域基礎看護学領域）  
岡永真由美 茂本咲子（育成期看護学領域）  
橋本麻由里（機能看護学領域）

### III. 実施方法

#### 1. 学内教員による検討会

##### 1) 第 1 回

第 1 回検討会を令和 4 年 10 月 3 日（月）18 時～19 時に開催した。今年度も、「専門看護師資格 5 年目更新審査受審に向けた研修会」と専門分野を超えた研修会を実施することを決定した。「専門看護師資格 5 年目更新審査受審に向けた研修会」については、今年度は更新予定者がいないことを確認し、事例提供者として次年度以降の更新予定者 2 名、アドバイザーとして 5 年目更新経験者 2 名に依頼することを決定した。専門分野を超えた研修会は、活動実績が少ない専門看護師の活動の充実を図ることを目的とし、「CNS の役割開発—語ってつかもう！専門看護師の技—」をテーマに、活動実績 5 年目未満の専門看護師 2 名を話題提供者、5 年目更新を終えている専門看護師 2 名にファシリテーターを依頼し、オンラインで実施することとした。また、学内教員の中で各回の運営担当者を決定した。

##### 2) 第 2 回・第 3 回検討会

第 2 回は令和 4 年 11 月 29 日（火）18 時～19 時、第 3 回は令和 5 年 2 月 7 日（火）18 時 15 分～19 時に開催し、各担当者から運営の進捗状況が報告された。また第 3 回検討会では、「専門看護師資格 5 年目更新審査受審に向けた研修会」の参加申し込み者は 5 名（がん看護 3 名、慢性疾患看護 2 名）であると報告があった。また、専門分野を超えた交流会は参加申し込みが 3 名であるため、本学専門看護師コース在学中の大学院生にも広報することを決定した。

## 2. 専門看護師の実践の向上を目指す研修会

### 1) 専門看護師資格 5 年目更新審査受審に向けた研修会

#### (1) 研修会の概要

令和 5 年 2 月 14 日（火）18 時～19 時 30 分に開催し、方法はオンライン（Teams）で実施した。参加者は、事例提供者 2 名（慢性疾患看護、家族看護）、アドバイザー 2 名（がん看護、慢性疾患看護）、申込者 4 名（がん看護 2 名、慢性疾患看護 2 名）、教員 8 名であった。研修会で検討する事例は事前にアドバイザーへ送り、内容を検討する時間を設けた。

事例提供者の持ち時間は各 40 分間とし、事例の説明後に 2 名のアドバイザーよりコメントを得た。事例提供者に対する共通したアドバイスは、①5 年間の活動の総括では、現状の分析に基づいた専門看護師活動とその評価を明確に記述すること、②事例の報告では、報告する役割を踏まえて、なぜこの事例を取り上げるのか明確にし、事例のテーマを示してから書き出す、③テーマで示した事例の特徴・個別性を意識して記述する、④専門看護師としてのアセスメントとそれに基づく意図的な介入及び評価を明確に記述する、等であった。全体を通して、専門看護師の思考と意図的な介入を明確に記すことの重要性について繰り返し語られた。その他、アドバイザーの更新前の経験として、他の専門看護師との事例検討を実施し、自分自身のアセスメントが適切か考える機会を持つことが有効であったことが話された。研修会に参加した専門看護師からは、アドバイザーからの助言を聞き、日々の実践における自分自身のアセスメントを振り返ったことや、5 年目更新に向けて定期的に活動実績を整理していきたいとの感想が聞かれた。

#### (2) 研修会実施後のアンケート結果

研修会終了後にアンケート調査を実施し、参加した専門看護師 8 名全員から回答と報告書での結果活用の了解を得た（回収率 100%）。研修会の開催は全員が良かったとの回答であった。事例提供者からは、自分自身が提示した事例について、読み手に伝わるように記述したが、アドバイスを受けて不足があることを実感し、自身のアセスメントや実践の意図、評価の視点を明確に記載していくことの重要性が学べたとの感想が記されていた。また、専門看護師の能力として実践の言語化の必要性を改めて学んだとの意見もあった。他の参加者からは、「5 年目更新に向けて、書類の記載のポイントや注意点について事例をもとにできて良かった」「自分の活動内容をまとめるポイントが分かった」など、自身の活動を役割に応じてどのように端的に記述するかについての理解できたとの意見があった。また、次年度以降も本研修会の開催を継続して欲しいとの要望が複数あった。

### 2) 専門分野を超えた研修会：「CNS の役割開発—語ってつかもう！専門看護師の技—」

開催日時：令和 5 年 3 月 7 日（火）18 時～19 時 30 分

参加者：県内外で活動する専門看護師 14 名（報告者 2 名、ファシリテータ 2 名含む）  
（慢性疾患看護 5 名、がん看護 6 名、精神看護 1 名、急性・重症患者看護 1 名、  
家族看護 1 名）

専門看護師コース学生 2 名、本学教員 9 名（専門看護師の教員 1 名含む）

会場及び方法：岐阜県立看護大学と各専門看護師の参加場所を繋いだオンライン会議

#### (1) 研修会の概要

話題提供者は資格取得後 3 年目の専門看護師に依頼し、1 名につき 30 分を配し、がん看護専門看護師、慢性看護専門看護師の順番で 15 分程度の報告の後、先輩専門看護師のファシリテーターが司会を担当して意見交換を行った。

話題提供者からは、専門看護師として活動を始めたころの戸惑いや、その中でも自分自身ができることを模索しながら、同部署の認定看護師やジェネラル看護師とのカンファレンス、多職種とのカンファレンス等を開催し、より良いケアについて検討を重ねることに取組んでいるとの報告があった。一方、自施設に専門看護師が少ない現状から、どのように自身の活動を認知してもらうかといった悩みや、実践したいと思う活動と実際にできていることのギャップを感じているといった報告があった。参加者からは、専門看護師としての活動を認知してもらう方法として、看護管理者へ定期的に活動を報告した経験や、看護師や多職種とのカンファレンス等を通じて自身の考えや実際の活動を知ってもらうことで認知度を上げるといった意見、リンクナースなど看護の推進者への働きかけを密にすることが専門看護師としての認知度を高め、結果的に相談に繋がるといったアドバイスがあった。さらに、どのような看護が必要とされているかを明確にするためのニーズ分析や、有効なケアを提供するための組織分析の重要性についても発言があった。また、専門看護師として活動を広げるためには、どのような相談にも誠実に対応することや、いつもオープンな姿勢でいること、他者と良好なコミュニケーションを図る努力をすることなど、基本的な姿勢が重要性であるとの助言があった。

#### (2) 研修会実施後のアンケート結果

研修会実施後に Microsoft Forms を使用してアンケート調査を実施した。結果は専門看護師と学生 13 名から回答を得られ（回収率 81.3%）、報告書での結果活用の了解も回答者全員から得られた。研修会の評価は、とても良かったが 7 名（53.8%）、良かったが 6 名（46.2%）であった。

今回は、話題提供者を資格取得後の経験が 5 年目未満の専門看護師に依頼したが、報告者とファシリテーターとのやり取りや参加者からの発言を通して、改めて自分自身の活動を振り返り、どのような活動ができるか考える機会になったとの意見が複数あった。また、組織の中で活動していくことで感じる困難感を共有できたことで、個々の専門看護師が困難感や焦燥感、不全感を感じながらも、現状を変えていこうと努力・工夫していることが分かり、自分も頑張ろうと思えたとの意見もあった。要望として、岐阜県内の専門看護師のネットワークづくりが必要であり、全体会や分野別などの交流や事例検討ができる機会があると良いとの提案があった。

オンラインによる研修会については概ね好評であり、平日の勤務後の出席が可能になることが理由として記されていた。また、今回、参加者募集期間の終盤になって本学専門看護師コースの学生に対しても参加案内をしたことで、学生 2 名が参加した。当初、学生は対象外としていたが、案内を送信する前から参加を希望していたとの情報も得ているので、次年度以降は専門看護師コースで学ぶ学生に対しても参加案内をしていく方向で検討したいと考える。

#### Ⅳ. 教員の自己点検評価

「専門看護師資格 5 年目更新審査受審に向けた研修会」は、修了者からのニーズがあり昨年度から実施しているが、参加者からは自身の看護を整理し、5 年目の更新に向けて何をすべきかが明確になったとの評価を得ている。さらに、研修会が単に更新用の報告書作成に向けた準備としての位置づけではなく、自身の活動を整理し報告することを通して、自分自身のアセスメントや何を意図して活動しているかを客観視する機会にもなっており、日頃の活動を振り返り、今後の活動のあり方を考えるための有効な機会となっていると考える。

また、分野を超えた交流会については、今年度は活動実績の少ない専門看護師へ先輩がアドバイスをするという企画であったが、経験の違いを超えて、それぞれが自分自身の活動を振り返り、より良い活動をするためにどうあったら良いかを考える機会になったと考える。岐阜県においては、複数の専門看護師が活動している施設は限られているため、多くの専門看護師は重責を感じながらもその思いを共有することができずにいることがある。このような状況において、研修会に参加し、専門看護師が日々の実践を振り返り、相互研鑽することに加えて、同様の悩みや感情の共有ができる機会は重要であると考え。参加者から、「研修会に参加したことで頑張ろうと思えた」といった感想が得られたが、多忙な中で孤軍奮闘している専門看護師がエンパワーされる機会となるよう、次年度以降も継続していく必要があると考える。加えて、コロナ禍以前には、専門看護師が中心となって事例検討会を企画・運営できるような取組をはじめていたため、今後は専門看護師が主体的に企画・運営する研修会への変化させていくことも検討していく。



## **Ⅱ．研修別報告**

### **3．養護教諭のスキルアップと 養護教諭像の醸成を目指した学びの会**



# 養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会

キーワード： 養護教諭      スキルアップ      現職教育

## I. はじめに

養護教諭には、学校という場でその職務を遂行するための様々な能力が必要とされる。養護教諭は、各学校に1名の配置である場合が多く、その職務内容は、校種、勤務学校の規模などにより大きく異なる。さらに、法制度の改正、時代のニーズにより職務内容を変えることや、国・県の方針を意識することも求められる。職務を遂行する過程で生じる課題について、小中学校では、近隣校との交流の機会（地域の養護教諭部会など）があるが、高等学校では、こうした機会も少ない。さらに高等学校では、生徒の生活地域は広域となり、扱う健康問題等も複雑になるため、より一層、悩みや葛藤の共有も難しい状況となっている。

このように、養護教諭が職務遂行において抱える悩みや葛藤は多様であり、さらにそれらを他者と分かち合うことや、十分な経験を持つ養護教諭への相談ができにくい現状がある。

岐阜県において養護教諭に対する現職教育としては、新規採用研修・6年目研修・中堅教諭等資質向上研修が行われているが、一般教諭の研修に比べ研修回数等が少なく、職務遂行において抱える悩みや葛藤、課題の解決が研修の場だけでは解消できていないのではないかと考えられる。本学においても、卒業者交流会が開催されているが、養護教諭の卒業後支援には養護教諭の職務事情、養護教諭の悩みや葛藤に特化したディスカッションや、ベテラン養護教諭からの助言、そしてネットワークづくりまで視野に入れた支援が必要であり、現行の卒業者交流会では各々の課題を解決するまでには至っていない現状がある。

また、新規採用後、養護教諭としての経験を一通り終えた卒業後4～6年目にあたる時期には、人事異動による職務変化を経験する時期であり、自身の養護教諭像を模索し始める時期でもある。この時期、各養護教諭にはスキルアップや、目指す養護教諭像の再検討が求められる。しかし、養護教諭自身に向上意欲があっても、前述した養護教諭の職務の特性から、スキルアップにつながる方法が見出せず、自分が描く養護教諭像を定めにくい現状がある。その結果、向上意欲の低下や、養護教諭の魅力さえも見失う場合も生じている。

これらのことから、卒業後1～6年目となる養護教諭が、職務における悩みや葛藤を話し合い、またベテラン養護教諭の助言・講義を受けることで、自分自身の課題と今後の目標を見つけ、より広い視野で養護教諭の在り方を検討する機会とし、現職教育の充実にもつなげたい。

## II. 事業担当者

本事業は、以下の教員で実施する。

育成期看護学領域：亀山 智加枝      機能看護学領域：松本 訓枝

## III. 事業（研修会）の企画：養護教諭学びの会の開催

### 1. 目的

卒業後1～6年目となる養護教諭が、職務における悩みや葛藤を話し合い、またベテラン養護教諭の助言・講義を受けることで、自分自身の課題と今後の目標を見つけ、より広い視野で養護教諭の在り方を検討する機会とする。それにより、養護教諭としてのスキルアップに向けた意欲を養う。また将来的には、自主的な勉強会等へと発展することを目指す。

### 2. 対象

経験年数1～6年目の養護教諭。希望があれば、卒業校・経験年数に問わず参加可能とする。本学の卒業生を含む、経験年数1～10年目程度となる養護教諭を対象に県内全域に実施案内を送付し参加者を募る。

3. 開催場所      1回目：本学での開催及びZoomを使用したオンライン  
                         2回目：本学での開催及びZoomを使用したオンライン

4. 開催回数      年2回    1回3時間程度

本学を会場として、年2回開催する。参加の有無について返信を依頼し、その際、職務に関する感想

(悩み・葛藤を含む)、今後学びたいことを募集する。研修時間は1回あたり3時間程度とする。実施内容は以下に示す。

1) 自己紹介

2) ベテラン養護教諭の講話

- ・卒業後1～6年目養護教諭の悩みや葛藤に関わる具体的な実践内容。
- ・ベテラン養護教諭の具体的実践及び、実践の中で培った養護教諭としての理念。

3) 悩みや葛藤、解決の方法等についてディスカッション

グループ編成は2通りとする。

- ・経験年数ごとに分かれた養護教諭とベテラン養護教諭、大学教員によって構成する。
- ・経験年数混在(ベテラン養護教諭含む)養護教諭、大学教員によって構成する。

4) 終了後アンケート

本会参加の感想、本会参加による仕事への意欲の変化、本会への希望などについて意見を集める。

5) 終了後アンケートより評価

#### IV. 研修会の実施方法・内容・結果

##### 1. 実施方法・内容

1) 第1回 開催日時：令和4年8月27日(土) 13:20～16:30

13:00～13:20 オンライン接続確認

13:20～13:30 開会

13:30～15:00 講話

○テーマ：養護教諭のスキルアップとネットワークづくりを目指して

「みんなに優しい保健室」

講師 坂祝町立坂祝小学校 養護教諭 井川 真綾 氏

「養護教諭と保健主事 二つの視点を生かした感染症対策」

講師 山県市立高富小学校 養護教諭 村瀬 和香奈 氏

15:10～16:20 対面交流会・オンラインミーティング

グループディスカッション・まとめ

2) 第2回 開催日時：令和4年12月4日(日) 13:20～16:30

13:00～13:20 オンライン接続確認

13:20～13:30 開会

13:30～14:40 講話

○テーマ：校種を超えて広い視野で職務を考える

「大規模校の複数配置～複数の視点を生かした生徒対応～」

講師 岐阜県立加納高等学校 養護教諭 小牧 由佳 氏

「つなげる保健教育～思春期に多い起立性調節障害の一例より～」

講師 各務原市立緑陽中学校 養護教諭 荒川 千登世 氏

14:50～16:20 対面交流会・オンラインミーティング

グループディスカッション・まとめ

##### 2. 研修会の実施結果

平成29年度から令和4年度までの参加者数を表1に、令和4年度参加者数の校種・経験年数別参加者数及び本学卒業者の参加者数を表2、表3に示す。(講師・ファシリテーター等も含む)



表 1 養護教諭学びの会参加者数(平成 29～令和 4 年度) 人

		合計	1～3 年	4～6 年	7～9 年	10 年以上
平成 29 年度	第 1 回	16	5	2	2	7
	第 2 回	17	6	6	3	2
平成 30 年度	第 1 回	22	8	11	3	0
	第 2 回	24	11	3	4	6
令和元年度	第 1 回	19	3	7	5	4
	第 2 回	25	6	7	5	7
令和 2 年度	第 1 回	23	7	4	2	10
	第 2 回	16	3	1	5	7
令和 3 年度	第 1 回	21	5	6	4	6
	第 2 回	13	4	2	1	6
令和 4 年度	第 1 回	22	6	5	3	8
	第 2 回	29	12	4	3	10

表 2 令和 4 年度 第 1 回養護教諭学びの会参加者数 人

	合計	1～3 年	4～6 年	7～9 年	10 年以上
小学校	12(4)	3(1)	4(2)	2(1)	3
中学校	4(1)	1(1)	1		2
義務教育学校	0				
高等学校	4	1		1	2
特別支援学校	1(1)	1(1)			
教育委員会	1				1
合 計	22(6)	6(3)	5(2)	3(1)	8

表 3 令和 4 年度 第 2 回養護教諭学びの会参加者数 人

	合計	1～3 年	4～6 年	7～9 年	10 年以上
小学校	10(3)	5(1)	2(1)	1(1)	2
中学校	6(3)	3(2)	1(1)		2
義務教育学校	0				
高等学校	8	3	1	1	3
特別支援学校	3(1)	1(1)		1	1
教育委員会	2				2
合 計	29(7)	12(4)	4(2)	3(1)	10

\*合計 ( ) 内の数字は、本学卒業者の参加人数

### 3. 参加養護教諭の評価

#### 1) 第 1 回

- (1) 研修内容について  
よかった (96%) ふつう (4%)
- (2) 参加方法について  
よかった (100%)
- (3) 研修日程について  
よかった (96%) ふつう (4%)

#### 2) 第 2 回

- (1) 研修内容について  
よかった (97%) ふつう (3%)
- (2) 参加方法について

- よかった (97%)    ふつう (3%)
- (3) 研修日程について
- よかった (76%)    ふつう (24%)

#### 4. 参加養護教諭の意見・感想

##### 1) 第1回

###### ○養護教諭の講話

- ・情報の整理など今後ますます大切になると思った。
- ・いろいろな学びができた。今後に生かしていきたい。
- ・記録の取り方だけではなく、その情報をどのように共有するか、保管するかについて知ることができた。また、感染症予防の取り組みを通して、組織的に周りの先生方と協力して進めていく大切さを知ることができた。
- ・他の学校の先生方の実践を聞き、身が引き締まる思いだった。ぜひ、今回、お聞きしたことを生かして子どもたちのために、取り組んでいきたい。
- ・実践を学ぶことができて嬉しかった。
- ・具体的な実践をご紹介いただくことで、ちょっとした工夫やアイデアなど、とても学びが多い。若手の先生は特に参考になることが多いと思う。
- ・若手の先生からの学びは、改めて自分を見直すこともできる。
- ・実際に養護教諭の生の現場の声を聞く機会はなかなかないため、とても良い機会だった。現場での実践につなげられそうな工夫が多々あったので、たくさん取り入れていきたい。
- ・自校で実践してみたいと思える具体的な内容が多く、とても参考になった。

###### ○交流会

- ・困っていることについて、他の養護教諭からアドバイスや実際の取り組みについてお話が聞けて良かった。
- ・偶然にも、7月の保健講習会のWeb交流会で一緒だった先生と交流会が一緒の組で、お話することができた。そのときは緊張して聞けなかったことが、聞けて自分の学びになった。できそうなことからやってみようと思う。
- ・普段疑問に思っていることを解消することができ、充実した時間だった。少人数で交流できたこともありがたかった。
- ・会議が減る中で、今日は自由に執務交流をする時間が十分にあり、ありがたかった。
- ・普段、学校では言えないようなことも相談できて、心が楽になった。
- ・同じ職種の方とお話できる機会がなかなかない中、今回交流させていただけて、先輩方からたくさん学ぶことができた。今後の勤務に生かしていきたいと思う。
- ・他地区の養護教諭の先生方と交流できたことがよかった。
- ・校種や経験年数をこえて交流できよかった。
- ・いつも困っていることを先輩方にたくさん聞けたので良かった。
- ・養護教諭の先生と交流できる場があまりないので、実践を教えていただけたら、悩みへの共感やアドバイスをいただけたらでき、とても学びの多い機会になった。また、いろいろな市町村や校種の先生と交流できたのもよかった。
- ・交流会では不安に思っていた事や困っていた事を経験も踏まえて教えて頂き、とても勉強になった。また、養護教諭は一人職のため、相談する人が少ないが、この会を通して人脈を広げることができた。
- ・養教としての在り方や、各学校での工夫点を聞いたことがとても学びになった。

###### ○研修の内容・方法等

- ・実際に会って学びあえる機会は大切だと感じた。
- ・久しぶりの参加でした。やはり、対面してお話しできるのはとてもありがたかった。
- ・時間、内容ともにとてもよかったと思う。
- ・実践発表からの交流会は流れがよく、日頃の悩みと実践発表を受けての意見交流もできよかった。

若い先生方の話を伺い、市内の若い先生方にも積極的に声をかけて相談にのってほしいと思うきっかけとなった。

- ・会場まで 遠い私にとって Zoom の参加方法を設定していただき 大変ありがたかった。
- ・養護教諭全体の実践力向上のためにも、ぜひ継続をお願いしたい。
- ・夏休みモードから学校モードに切り替える丁度良い時期に研修を受けることができた。これを機に2学期からまた頑張ろうと思えた。
- ・講話の後の交流会では、講話の内容のことだけでなく、一年目のことや講師の方の大学生活のことや、国試の対策をどうしてきたかなど、気になることを質問できて勉強になった。
- ・若い人たちの熱い眼差しを感じ、来週から頑張ろうという気持ちになった。

## 2) 第2回

### ○養護教諭の講話

- ・実際に養護教諭として働いていらっしゃる先生方の話を聴き、子どもたちとの関わり方や捉え方、保健指導の方法や工夫、学校で健康に関することをどう位置づけていくのかなどなどたくさんの実践について知ることができたため、参加してよかった。
- ・養護教諭だけでなく担任やほかの先生と連携し、特別活動などと結びつけて実践をしていくという生活に結びついた保健教育の実際を知ることができてとても勉強になった。また、他の人との意見の違いがあってもこれが私の意見だからと閉ざしてしまうのではなく、その人がどうしてそう思っているのか、聞く姿勢や知ろうとする姿勢、また私の想いも知って欲しいという姿勢を持つことも大切だということを学んだ。
- ・お二人の方のすばらしい実践や参加者の方々からのご意見がとても勉強になった。保健指導の時間の作り方等 今後に活かしていきたい。
- ・生徒に対する関わり方に加えて複数配置の場合のもう一人の養護教諭との関わり方や活動の取り組みの評価の仕方など、様々な場面を想定したお話を、沢山の方から聞かせて頂くことができ、非常に多くのことを学ぶ時間になった。
- ・実際の実践がきけて、どのようにすすめていけばよいかわかったので、活用していきたい。
- ・講師だと学ぶ場も少なく、なかなか実践を聞ける場がないのでありがたい。私はまだ養護教諭としての自信がないため、今日のように、「こんな保健指導したよ」とか、「こんな保健だよりや掲示は反響があったよ」とか、「けがや病気でこんな事例があったよ(レアなケース等)」実際の先生方の実践を聞かせて頂けたりすると、とてもありがたいなあと思う。
- ・日々で手一杯だが、ここで学んだことを少しでも持ち帰って日々の活動に活かしていきたいと思う。
- ・複数配置の視点、保健指導の継続ポイント、自校の反省から次年度への繋げ方、小中高・特別支援学校各々の立場からの意見が伺え参考になった。
- ・現場で働く先生方の取り組みや、取り組みの工夫点、先生方の思いを沢山知ることができてとても勉強になった。
- ・先生方の実践を拝聴することで自分の実践を振り返り、怠けている点が客観的に捉えられた。
- ・講師の先生方から、生きた実践を聞くことができたので、自校に活用していきたいと思った。

### ○交流会

- ・若い先生からベテランの先生まで交流させていただくことができ、他ではなかなかない貴重な時間だった。
- ・様々な経験年数の方々とお話ができる貴重な機会であり、学ぶことばかりだった。ぜひ来年度以降も開催していただきたい。
- ・色々な先生方のご貴重な体験や意見を聞くことができて、とても勉強になった。
- ・一人職なので、他の教職員や他校の養護教諭と意識的に交流して、常に人と関わるようにしたいと思った。様々な方と繋がる素敵な機会がありがたい。
- ・同じ養護教諭の仕事をしている人と実践交流をしたり、日々の悩みについて話を色々な方とできたりする機会はここにしかないと感じている。経験がないということをネガティブに捉えるのではなく、何でも吸収できる期間であると捉え、明日からも私らしく子どもに寄り添ってほしいと

思った。

- ・私立勤務のため、このような機会はとてもありがたい。後半の意見交換会で異なる校種の先生方とお話して、実践や保健室経営について学ぶことができた。
- ・校種、年齢と様々な方と交流できたのは、とても刺激的で活力をいただいた。明日へのエネルギーになった。
- ・自分の見方に固執することなく色々な人の意見を聞くことの大切さを改めて感じた。
- ・交流会では、経験年数や校種が異なる先生方とお話できて、視野が広がった。もしまた機会があれば、同じ校種の先生のお話も聞いてみたいと思った。

#### ○研修内容・方法等

- ・オンラインで参加できることもありがたい。ぜひ継続していただきたい。
- ・オンラインは参加ハードルが低く、チャット機能活用で意見反映頂き 学びも深まった。
- ・今回久々に集まっての研修となり、とても嬉しく思った。Web だとあまり他の先生と繋がりが持てなかったり、気軽に話ができなかったりするため、こうやって集まって顔を見ながら話ができる機会があるとありがたいと思う。
- ・遠くから参加される方のことを思うと、土曜の方がよいかなと思った。また、朝が大変にはなるが、午前開催が帰りは楽かと思う。それと午後だと、午前に予定を入れにくく、結局一日潰れてしまうため、受けたい学びの時間ではあるが、休みを有効に使うためにも午前でもよいのかなと思う。(学びの後に、ゆっくり仲間と交流することもできる)

## V. 成果

### 1. 看護職の研修としての有用性について

#### 1) 養護教諭学びの会参加者のニーズに合わせた学びの提供

令和 4 年度の研修内容について検討する段階では、現代的な健康課題の解決に向けての実践や、経験年数が少なくても前向きに取り組めるための内容を取り入れることとした。

講師には事前に連絡し、自身の困難に感じた点や改善方法などを含め、具体的に話していただくよう伝えたことで、若手の意欲が高まるよう講話内容を工夫していただけた。

交流会については、時間を十分確保し、意図的にグループ構成したり、少人数にしたりした。また、講師やファシリテーターに事前に連絡し、若手の養護教諭が安心して話せる雰囲気や、交流を通して解決策を見出せるような進行を依頼したことで、交流会の充実につなげた。

#### 2) 学び・効果の内容

参加者の意見や感想から、学び・効果の内容を【ベテラン養護教諭の実践からの理解】【スキルアップにつながる学び】【職務推進意欲の向上】【悩み・不安の解消】に分類した。詳細を表 4 に示す。

表 4「養護教諭学びの会」学び・効果の内容

	学び・効果の内容
ベテラン養護教諭の実践からの理解	情報の整理など今後ますます大切になると思った。
	記録の取り方だけではなく、その情報をどのように共有するか、保管するかについて知ることができた。
	感染症予防の取り組みを通して、組織的に周りの先生方と協力して進めていく大切さを知ることができた。
	自校で実践してみたいと思える具体的な内容が多く、とても参考になった。
	子どもたちとの関わり方や捉え方、保健指導の方法や工夫、学校で健康に関することをどう位置づけていくのかなどなどたくさんの実践について知ることができた。
	養護教諭だけでなく担任やほかの先生と連携し、特別活動などと結びつけて実践をしていくという生活に結びついた保健教育の実際を知ることができてとても勉強になった。
	他の人との意見の違いがあってもこれが私の意見だからと閉ざしてしまうのではなく、その人がどうしてそう思っているのか、聞く姿勢や知ろうとする姿勢、また私の思いも知って欲しいという姿勢を持つことも大切だということを学んだ。
	生徒に対する関わり方に加えて複数配置の場合のもう一人の養護教諭との関わり方や活動の取り組みの評価の仕方など、様々な場面を想定したお話を、沢山の方から聞かせて頂くことができ、非常に多くのことを学ぶ時間になった。
	複数配置の視点、保健指導の継続ポイント、自校の反省から次年度への繋げ方、小中高・特別支援学校各々の立場からの意見が何え参考になった。
スキルアップにつながる学び	養教としての在り方や、各学校での工夫点を聞いたことがとても学びになった。
	現場での実践につなげられそうな工夫が多々あったので、たくさん取り入れていきたい。
	保健指導の時間の作り方等 今後活かしていきたい。
	一人職なので、他の教職員や他校の養護教諭と意識的に交流して、常に人と関わるようにしたいと思った。
	生きた実践を聞くことができたので、自校に活用していきたいと思った。
	自分の見方に固執することなく色々な人の意見を聞くことの大切さを改めて感じた。
職務推進意欲の向上	実践を教えていただけた、悩みへの共感やアドバイスをいただけた、とても学びの多い機会になった。
	他の学校の先生方の実践を聞き、身が引き締まる思いだった。ぜひ、今回、お聞きしたことを生かして子どもたちのために、取り組んでいきたい。
	日々で手一杯だが、ここで学んだことを少しでも持ち帰って日々の活動に活かしていきたい。
	経験がないということをネガティブに捉えるのではなく、何でも吸収できる期間であると捉え、明日からも私らしく子どもに寄り添っていこうと思った。
	校種、年齢と様々な方と交流できたのは、とても刺激的で活力をいただいた。明日へのエネルギーになった。
悩み・不安の解消	普段疑問に思っていることを解消することができた。
	普段、学校では言えないようなことも相談できて、心が楽になった。
	困っていることについて、他の養護教諭からアドバイスや実際の取り組みについてお話が聞けて良かった。

### 3) 研修内容の評価

研修内容については、多くの参加者から「よかった」という評価を得ており、学び・効果の内容としては、【ベテラン養護教諭の実践からの理解】の分類が多く寄せられた。また、現場でのスキルアップにつながる学びが得られたことや、職務を推進していく意欲につながったり、悩みや不安が解消されたりしたという効果もみられた。

## 2. 参加看護職の意見と成果

講師の講話を通して、職務の具体や工夫を学ぶことができたといえる。また、参加者同士で悩みや不安を相談できる機会を意図的に仕組むことで、若手の養護教諭の勇気や意欲につながり、自らが理想とする養護教諭像を思い描く機会となった。参加したベテラン養護教諭についても、若い先生方の話を伺い、市内の若い先生方にも積極的に声をかけて相談にのっていかうと思うきっかけとなったという感想があった。これは養護教諭同士がつながる場の重要性を示唆しているといえる。

交流会をとおして参加者同士のネットワークが広がったことで、次年度への参加につながっていくと期待される。

## VI. 教員の自己点検評価

### 1. 実践の場に与えた影響

養護教諭学びの会で得られた実践の工夫を、勤務校でも活用していきたくという意見があった。自身の職務内容の充実に向けて主体的に考えて改善していく意欲につながったと推察される。

### 2. 本学の教育・研究活動に与えた影響

養護教諭の学びを知ることは、基礎を形成する上での大学教育と実践をつないでいくための学修の在り方を考えるうえでの貴重な機会となった。また、卒業後の支援につながり、広く現場の養護教諭との関係を作るうえでも有意義であった。

### 3. 研修方法における評価と課題

オンラインの接続や音声等の問題はほとんどなくスムーズに実施できた。今年度から大学での受講も可としたことで、対面で受講したい参加者は大学で受講していただいだけ、対面でつながるよさを再確認していただけた。

開催日や時間については、さまざまな意見がある。今後も、参加者が参加しやすい方法や学びや効果が実感できる方法を検討していく。

## VII. 今後の課題、発展の方向

養護教諭に特化した本事業を実施することの意義は大きい。参加者自身が、実践の省察と同職種からの評価を得ることによって生まれる達成感や満足感は、スキルアップや養護教諭像を醸成するために必要なことだと感じる。今後も、岐阜県が示す育成指標に基づき、各育成段階の養護教諭像に向けて、参加者と討論しながらさらに養護教諭像の醸成を目指していく。

## **Ⅱ．研修別報告**

### **4．看護実践研究学会への研究支援**





# 看護実践研究学会への研究支援

キーワード： 看護実践研究 研究支援 看護実践研究学会

## I. 研究支援の趣旨

岐阜県立看護大学では、看護実践研究指導事業の取り組みのひとつとして、平成 15 年度から「岐阜県看護実践研究交流会（以下、交流会とする）」の会員を対象に研究支援を実施してきた。本学教員は、賛助会員として継続して交流会の活動を支援してきており、研究支援もその一つであった（岩村ら, 2004 ; 平山ら, 2009 ; 大川ら, 2015）が、交流会は、平成 30 年 9 月に設立された「看護実践研究学会（以下、学会とする）」へと組織移行し、平成 30 年度末をもって活動を終了した。本学会は、看護実践の改善・改革に寄与する看護実践研究の知の体系化と会員相互の交流による看護実践研究の推進・発展を図ることを目的としており、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科の修了者が中心となって立ち上げた学会である。

研究支援については、学会において継続されるが、移行期であることから、これまでと同様に看護実践研究指導事業として研究支援を引き続き行なうこととなった。本学では、学会との協働体制のもと、これまでの実績を基盤にしながら研究支援を行うと共に、学会の活動に関して必要な支援を行うことで、看護実践研究の充実・発展を推進し、本学の使命である岐阜県内の看護の質向上に貢献していきたいと考えている。

## II. 担当者

本事業の運営実務は、以下の教員が実施した。

大川眞智子、長屋由美、小森春佳（令和 4 年 9 月末まで）、足立円香（令和 5 年 1 月から）、奥村美奈子（看護研究センター）

## III. 研究支援の運営・方法

学会会員への研究支援の具体的な運営・方法に関しては、学会と協議し、以下のとおりに決定した。研究支援の運営実務については、引き続き看護研究センターが担う。

### 1. 支援する研究

研究支援の対象となる研究には、下記①～⑤の要件を求めている。④以外は、学会設立以前の交流会の会員を対象にした研究支援事業の要件と同じだが、④に記載した通り、研究代表者は学会の会員で岐阜県内に就業している看護職であることとし、卒業者・修了者支援の観点から、本学卒業者・修了者は県外就業者も可としている。

- ①学会の会員が主体的に取り組む研究であり、所属機関等での協力・支援等が得られること
- ②看護実践の改善・改革に寄与する研究であること
- ③面接やメールによる数回程度の助言・相談で支援可能な研究であること
- ④研究代表者は、学会の会員であり、岐阜県内で就業している看護職であること。但し、本学卒業者・修了者は県外就業者も申請が可。
- ⑤研究代表者は、研究支援を受ける期間中、複数の研究課題の研究代表者として支援を申請することはできない（共同研究者としての支援申請は可）。

### 2. 研究支援の流れ

研究支援の申請受付から支援適用の決定、支援の開始、支援終了後の自己点検評価といった、研究支援の流れは、図 1 に示しているとおりである。

#### 1) 研究支援の申請受付と支援教員の決定

研究支援を望む会員は、随時、申込用紙を学会事務局（看護研究センター）に提出する。看護研究センターが窓口・調整役となり、支援教員を決定する。

なお、支援担当教員の選定は、教員の専門領域、申込者が所属する施設への実習や共同研究事業での関わり等を考慮するとともに、可能な限り複数領域の教員で担当できるよう努めている。

#### 2) 支援担当教員と申込者の初回面接

申込者との初回面接においては、研究支援の適用の可能性を探るだけの面接ではなく、研究の方向性を確認し、申込者の意思決定へのアドバイスや研究への意欲をさらに高めるような支援的面接を実施することを取り決めている。

支援担当教員は、申込者との初回面接において、申込用紙をもとに研究の動機や目的・方法・準備状況などを確認する。その際、申込用紙に書きされていない申込者の意図を十分に聞き、明確になっていない部分を話し合うことによって、研究内容を明確にしている。そして、その結果で、研究支援の可能性を検討し、研究支援の適用・不適用の決定を行う。

初回面接用紙に所属部署の要請の有無や、適用となった場合の今後の支援予定を記入できるようにし、準備状況、達成目標、完成期限や発表予定のスケジュール等を確認して支援が行えるようにしている。また、研究支援に関する覚書を作成し、看護職と支援担当教員の双方が初回面接で確認することにより、了解して計画的に支援が行えるようにし、加えて、研究支援の適用・不適用を決定する際のチェックポイントについての申し合わせ事項を作成している。

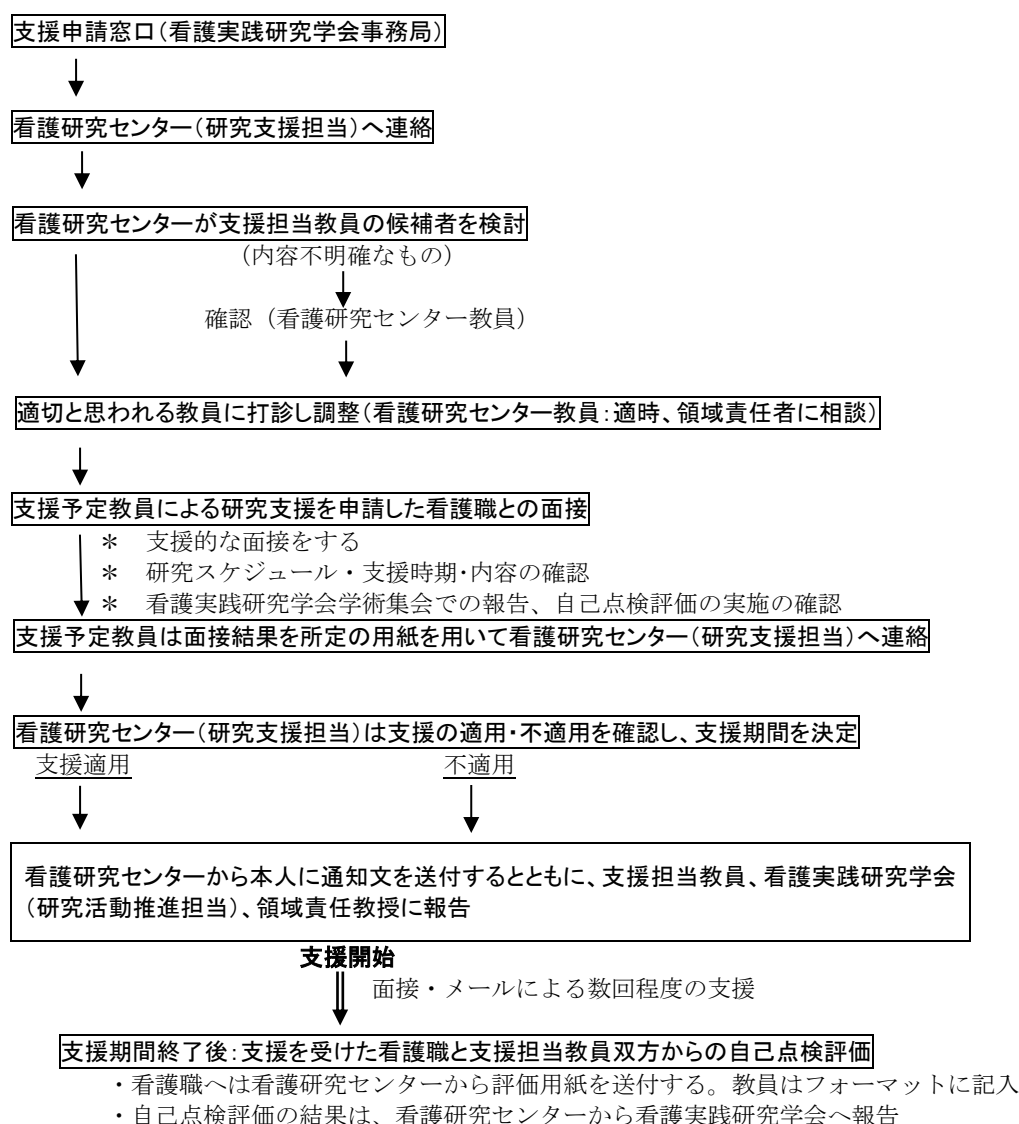


図1 研究支援の流れ

### 3. 支援方法

看護職が主体的に研究に取り組むことを重視し、1年間の支援期間内に研究計画や進捗状況に応じて、数回程度の面接やメールによる相談への対応や助言、指導といった支援を行う。その際、実践から乖離した支援にならないよう、対象者に来学を求めるだけでなく、現地に出向く形態も可能にしている。また、教員個人の専門性の限界や助言の偏りを防ぐことを考慮し、2名以上の教員で行う。

#### 4. 研究に関わる経費

看護職が研究支援を受けるために来学する際の経費を含め、研究に要する費用は、申請した看護職の負担となる。大学の教員が現地に出向く場合には、大学の経費の範囲内で行い、支援対象者からの謝金等は不要である。

#### 5. 看護実践研究学会学術集会での報告

研究支援を受けた看護職は、研究結果・成果を看護実践研究学会学術集会で報告することが求められている。

#### 6. 自己点検評価

大学の活動評価のため、他の活動と同様に自己点検評価を実施する。1年間の研究支援期間終了後に、教員と支援を受けた看護職双方からの評価を行う。

### IV. 研究支援の実績

#### 1. 運営状況

##### 1) 研究支援の課題・対象・支援教員の状況

令和3年度に支援を開始し、令和4年度に引き続き支援した研究課題は2題（表1-1）であり、支援対象は、病院（2施設）の看護師4名、他職種4名であった。支援担当教員は、地域基礎看護学領域および成熟期看護学領域から選出された4名（各課題につき2名）であった。ただし、1題は研究継続が難しく支援中止となった。

令和5年1月末現在、令和4年度の支援申請は4題であったが、支援適用となり令和4年度に支援を開始したのは3題である（表1-2）。支援を開始した研究課題の支援対象は、病院（3施設）の看護師6名であった。支援担当教員は、地域基礎看護学領域および機能看護学領域、成熟期看護学領域、看護研究センターから選出された7名である。ただし、1題は研究継続が難しく支援中止となった。

表1-1 令和3年度に支援を開始した研究課題

番号	研究課題	申込者	支援担当教員（所属領域）	支援適用期間
1	退院支援アセスメントシートを活用した退院支援への意識調査	病院 看護師2名	加藤由香里（地域基礎看護学） 船橋真子（成熟期看護学）	令和3年12月 ～4年11月
2	地域包括ケア病棟における多職種の協働の強化	病院 看護師2名、作業療法士1名、理学療法士1名、介護福祉士2名	山田洋子（地域基礎看護学） 柴田万智子（地域基礎看護学）	令和3年12月 ～4年11月 (中止)

表1-2 令和4年度に支援を開始した研究課題

番号	研究課題	申込者	支援担当教員（所属領域）	支援適用期間
1	岐阜県のがん患者の両立支援を当事者である支援者が行うための基盤づくり	病院 看護師1名	梅津美香（成熟期看護学） 鳴海叔子（成熟期看護学） 船橋真子（成熟期看護学）	令和4年5月 ～5年4月
2	療養病棟入棟時に使用するオリエンテーションシートの見直し～質の高いエンドオブライフにつなげるために～	病院 看護師3名	長屋由美（看護研究センター） 高橋智子（地域基礎看護学）	令和4年10月 ～5年9月
3	面会制限下、家族との関わりを活かした個別的ケア	病院 看護師2名	古澤幸江（機能看護学） 木下拓哉（地域基礎看護学）	令和4年10月 ～5年9月 (中止)

#### 2. 支援対象（看護職）の自己点検評価

令和4年1月から12月末までに支援が終了した1題の支援対象（看護職）から、以下のとおりの回答が得られた。

##### 1) 研究計画の進行状況

「終了」している。

##### 2) 研究支援を受けて良かったこと

「研究自体が初めてだったので、1つ1つ丁寧に教えてもらえた。メールの返信も早くとても助かった」

た」であった。

3) 研究支援を受けて良くなかったこと

特になし。

4) さらに欲しいと思った支援

特になし。

5) 実践の改善・充実について

(1) 実践の改善・充実につながったこと

退院支援の意識向上につながった旨が記載されていた。

(2) 今後、どのように実践の改善・充実につなげていきたいか

アセスメントの内容の充実が今後の課題である旨が記載されていた。

(3) 実践の改善・充実につながりにくい理由

記載なし。

6) 研究支援システムの改善点

特になし。

7) その他、研究支援についての意見・感想

研究が無事に終了したことに感謝する内容であった。

3. 支援を実施した教員の自己点検評価

令和4年1月から12月末までに支援を終了した1題の支援担当教員からの回答である。

1) 研究支援の内容・方法

研究支援の具体的内容は、「研究計画書の作成」、「現地施設における倫理申請」、「データ分析」、「看護実践研究学会学術集会の報告準備や抄録作成」、「論文作成」に関する助言であった。

支援方法としては、大学での面接が1回、オンラインでの面接が3回、メールでの支援が10回程度であった(表2)。

表2 研究支援の方法と回数

番号	大学で面接	現地で面接	オンライン面接	メール	電話・FAX・郵便
1	1回	—	3回	10回程度	—

2) 実践の改善・充実について

「現場の退院支援への更なる充実につながった。実践現場での退院支援の充実に向けた核となる人材育成にもつながっていると感じた」といった内容が記載されていた。

3) 教育・研究活動の発展への繋がり

「現地の研究者が達成感を持てるのは良いことだと思う。継続研究となり利用者支援が充実すると、学生実習にも良い影響があるため大変良い」といった内容が記載されていた。

4) 研究支援実施上の困難さ

短期間で論文作成に関する指導・助言をすることに関する記載があった。

5) 研究支援システムの改善点

研究終了頃、論文作成に関する指導・助言を短期間で行ったことに関する内容であった。

6) その他(意見・感想)

特になし。

V. 研究論文の投稿支援

研究支援を受けた看護職からの「研究論文の投稿支援」に関するニーズが確認されたことから、看護実践研究学会会員への研究支援を受けた看護職を対象として、令和3年12月から「研究論文の投稿支援」を開始した。1件の研究課題について投稿支援を行っていたが、令和4年度に取り下げられた。

VI. 看護実践研究学会の活動支援

1. 看護実践研究学会の運営に関する支援

看護研究センターは、看護実践研究学会事務局として、会員名簿の作成、学術集会／総会開催の案内や年会費払込み依頼等の発送、学術集会チラシの印刷・掲示などの諸事務を担うと共に、学会と大学との橋渡しの役割や学内外との連絡・調整など窓口的役割を果たした。また、看護実践研究指導事業(看護実践研究学会への研究支援)から、学術集会抄録集及び学会誌の印刷費の補助を行ない、学会運営を経済的側面からも支援した。なお、学会の会員数は151名(令和5年1月末現在)である。

## 2. 看護実践研究学会学術集会の開催に関する支援

令和4年9月3日（土）に看護実践研究学会第4回学術集会（学術集会長：奥村美奈子教授、テーマ：未来を拓く一多分野協働による看護実践研究の可能性一）が開催され、140名（内訳：会員90名、非会員46名、手続き中など4名）の参加を得た。なお、今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大状況を鑑みて、オンラインにて開催された。

当日は、シンポジウム、及び一般演題報告9題（そのうち、本学教員から研究支援を受けて取り組んだ研究課題が1題）、交流セッション2テーマが実施された。

学術集会の準備・運営は、学会の学術集会企画運営担当が中心になって進めたが、看護研究センターとしては、抄録集の印刷対応等を実施した。

## VII. 課題および改善策

### 1. 研究支援のあり方・方法について

上述した支援教員の自己点検評価によると、支援方法は、大学での面接が1回、オンラインでの面接が3回、メールでの支援が10回程度と、いずれも複数回にわたっていた。新型コロナウイルス感染症の影響により、今後はオンラインでの面接やメールでの支援がますます増えていくと思われる。今後も、看護職のネット環境を初回面接で確認し、オンラインを十分に活用していくことが必要である。

支援を受けた看護職の意見からは、研究に取り組んだことによる実践の充実・改善につながる認識の変化が確認された。一方で、研究継続が難しく支援中止となる研究課題もあり、実践現場におけるコロナ禍の影響は大きいと推察する。しかし、今後も引き続き、看護職者の支援ニーズに応じた研究支援を行ない、看護実践研究の推進を図ると共に、岐阜県の看護の質向上に寄与していくことが本学の責務と考える。

また、支援した研究課題の中には、修了者が研究メンバーに入っている研究課題もあり、研究支援を通して、修了者を支援することにもなっている。今後は、修了者の研究支援ニーズを把握し、実践現場における看護実践研究の継続的な取り組みに向けた支援など、修了者への研究支援も重要と考える。

### 2. 看護実践研究学会の活動支援について

看護実践研究学会は、2019年に設立され、本学大学院修了者を中核として運営されている。学術集会の準備・運営や年度末に発刊予定の学会誌の作成に関する詳細は、学会側が中心となって進めており、本事業としては、学会事務局としての機能を果たすことに加えて、学術集会抄録集及び学会誌の印刷費補助が学会活動に対する主な支援であった。

現段階では、学会の基盤づくりに貢献することが重要と考え、学会側と協議を重ねながら諸活動に取り組み、学会活動を支援してきた。学会と本学がどのように連携・協働していけば看護実践研究の更なる推進・発展へとつながるのか、学会と本学の将来像を鑑みながら検討を深めていくことが今後の取り組むべき課題であると考ええる。

### 【文献】

平山朝子，岩村龍子，大川眞智子．（2009）．看護研究支援システムの構築に果たすべき大学の責務．

看護展望，34（5），47－51．

岩村龍子，グレッグ美鈴，大川眞智子．（2004）．看護大学における岐阜県内看護職への研究支援システムの構築．岐阜県立看護大学紀要，4（1），185－190．

大川眞智子，岩村龍子，田辺満子，丹菊友祐子，前田美佐子．（2015）．岐阜県立看護大学における看護実践研究支援の成果と課題．岐阜県立看護大学紀要，15（1），139－147．



## **Ⅱ．研修別報告**

### **5．高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会**





## 高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会

キーワード： 高齢者看護 誤嚥・窒息 食支援

### I. はじめに

高齢者にとって、食事が誤嚥の原因とならないようにすることは当然の課題であるとともに、食事が疾病の治癒や健康の維持のみならず、最期まで自分らしい豊かな人生を送ることができるためにも非常に重要であることは言を俟たない。そのため、病院入院中および介護施設入所中は、医師、看護師、介護職などが、適切に摂食嚥下を支援できることが必要であり、これを実現するための教育研修体制の整備や多施設連携が、喫緊の課題である。さらに、在宅で介護をうける高齢者も多く、在宅で高齢者の食を支える介護職や介護者らが、適切に摂食嚥下を支援できることも重要な課題であり、病院、施設と在宅との連携、介護者らに対する教育や指導も必要である。看護職には、介護者を教育指導できるスキルも求められる。

上記のような視点から、本学の在宅看護支援に関する研究助成事業（2020～2021年度）「高齢者の誤嚥・窒息ゼロに向けた看護職・介護職の課題及び多職種・多施設協働に向けた課題の明確化」において、多職種・多施設の研究メンバー（岐阜県立看護大学の看護学領域の教員、医療施設勤務の看護師、摂食・嚥下障害看護認定看護師、薬剤師、医療問題を専門とする弁護士）で岐阜県内の誤嚥・窒息ゼロに向け取り組んできた。

これまでの取り組みにおいて、岐阜県の病院・介護施設における摂食嚥下支援体制の現状と課題を把握するために、2回の質問紙調査を行ったところ、多くの病院や施設において看護職・介護職を対象とした食事介助や摂食嚥下訓練に関する教育が十分実施されていないことが明らかとなった。具体的には摂食食物の選択、摂食時の援助、観察、嚥下訓練、嚥下機能評価、薬剤の知識などに関する課題が確認された。病院・介護施設における摂食嚥下に関わるスクリーニングおよび食事介助に関連する看護職と介護職への教育研修体制の整備の必要性、対象の摂食嚥下支援体制として、医師・看護師・言語聴覚士・薬剤師・栄養士などの対象に関わる多職種の連携も不可欠であることが示唆された。また、個別面接調査の結果及び研修会等の参加者のアンケート結果からは、現場における高齢者の食を支える看護職・介護職を対象とした教育が不足していることなどが明らかとなった。これらの課題解決に向けて、摂食介助の場面、食事中の窒息の場면을再現した研修を実施して、看護職や多職種を講師として招聘し、誤嚥・窒息ゼロを目指した知識の提供、また高齢者の食を支える看護職や多職種が現場で活用できる技術の提供を行った。

このような取り組みの結果を踏まえ、継続した学びの機会の提供は必須であると考え、本事業においては、岐阜県内で高齢者の食を支援している看護職をはじめとした多職種を対象とし、先行研究で明らかになった課題解決に向けて取り組む。具体的には、食を支援する看護職・介護職への教育・研修体制や多職種による摂食嚥下支援体制の整備の必要性があるという課題解決に向けて、研修を企画・開催する。高齢者の誤嚥・窒息を防ぐため、岐阜県内で高齢者の食を支援する看護職をはじめとした多職種の知識・技術の向上を図ること、高齢者の食を支援する職種が各施設の現状について語り合い・交流し、共に学び合い多職種連携に繋げることを目標として取り組む。

### II. 事業担当者

本事業は以下の担当者と実施した。

機能看護学領域：古澤幸江、宗宮真理子（4～8月）、米増直美

成熟期看護学領域：宇佐美利佳

＊事業協力者

愛知学院大学：渡邊法男（薬剤師）、増田・横山法律事務所：増田聖子（弁護士）、

岐阜市民病院：宮田智子（摂食・嚥下障害看護認定看護師）、羽島市民病院：小寄まゆみ（看護師）

### Ⅲ. 研修の実施計画と準備

#### 1. 対象の選定

岐阜県内の病院、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、訪問看護ステーション、診療所、歯科領域で勤務する高齢者の食を支援する職種とする。

#### 2. 研修計画

##### 1) スケジュール

表1 研修会スケジュール

日時	開催内容
第1回誤嚥・窒息 ZERO 研修会 令和4年7月16日(土) 9時30分～12時30分	研修会テーマ：事例から学ぶ 誤嚥・窒息 ZERO 第一部：講義（9時30分～11時20分） 講義①嚥下障害、薬剤が原因かも 講師：渡邊法男（薬剤師）愛知学院大学薬学部准教授 講義②事故から学ぶ誤嚥・窒息 ZERO 講師：増田聖子（弁護士）増田・横山法律事務所 第二部：交流会（11時20分～12時20分） ファシリテータ：宮田智子（摂食・嚥下障害看護認定看護師） 小寄まゆみ（看護師）等 方法：オンラインで開催
第2回誤嚥・窒息 ZERO 研修会 令和4年12月10日(土) 9時30分～12時30分	研修会テーマ：シームレスな多職種連携 第一部：講義 講義①急性期病院における誤嚥・窒息予防の取り組み 講師：宮田智子（摂食・嚥下障害看護認定看護師） 岐阜市民病院 講義②多職種で取り組む口づくり 講師：三輪俊太（歯科医師） 医療法人恵真会 三輪歯科医院 講義③動く口に整えましょう 講師：合掌かおり（歯科衛生士） 医療法人かがやき総合在宅医療クリニック 第二部：交流会 講師を囲んでフリートーク ファシリテータ：増田聖子（弁護士）、小寄まゆみ（看護師） 渡邊法男（薬剤師） 方法：ハイブリット形式（対面とオンライン） 講義室 105

##### 2) 研修会終了時にアンケート調査を実施

##### 3) 修了証の発行

第1回と第2回研修会の両日に参加した者に発行する。

#### 3. 研修の到達目標

到達目標は以下の2点である。

- 1) 岐阜県内の高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指し、現場における食を支援する際の課題解決に向けて、看護職・多職種が学習できるよう支援する。
- 2) 食を支援する職種が共に学び合う機会を提供し、現場の課題解決に繋げる。

## IV. 研修の実施

### 1. 研修参加者の概要

第1回誤嚥・窒息ゼロ研修会の参加者は86名、第2回誤嚥・窒息ゼロ研修会の参加者は88名(対面6名、オンライン82名)であった。

### 2. 研修会の概要

#### 1) 第1回誤嚥・窒息ゼロ研修会の概要

##### (1) 講義の概要

講義①抗精神病薬、抗不安薬(睡眠薬)、オピオイドによる薬剤性嚥下障害の事例提示およびこれらの薬剤を使用する際の注意事項について

講義②誤嚥・窒息事故の事例を通じて、多職種による事故原因の究明および再発防止策の策定および実施について

##### (2) 講義内容への質疑応答の内容

講義中に送られたチャットでの質問を進行役が紹介し、講師から返答があった。その内容を以下に示す。

##### ①裁判事例について

- ・施設では全粥、ミキサー食を摂取していた利用者が、入院後固形食に変更されていた。よくあることなのか。

→嚥下造影の結果、大きい問題はないのであれば、食欲や嚥下機能の問題により異なる。対象の嚥下機能を評価した上で食事形態を決定する。ミキサー食の見た目は良くなり、評価した結果問題なければ固形物に変更することはある。

- ・義歯や口腔状態の確認はしていたのか。

→一定かではないが、入院当初に確認する必要がある。摂食に関するカンファレンス等も開催できるとよかった。

- ・家族への連絡は密にしていたのか。

→判決書きの内容以外は不明である。記録には家族がよく面会に来ていたとあったため、連絡する機会は沢山あった。

- ・気持ちに寄り添うことは大切ではあるが、リスクが高いのであればおにぎりを選択することは難しい。

→希望を叶えるだけでなく、安全に食べられるかどうか判断があったのが重要である。

##### ②薬剤について

- ・リスパダールを使用しているが、誤嚥リスクが高いと学んだ。使用する場合には気を付けるべきこと等を知りたい。

→使用するかどうかの判断は難しいが、ステロイドやオピオイド等薬剤によるせん妄など原因について確認し、排除できるものは排除することが大切である。使用后、数日眠気が出る人もいる。影響の程度も確認する必要がある。使わない判断は難しい。

##### ③食事摂取の判断について

- ・薬の服用はなく、開眼しないが促すと開口したり頷いたりと思意思反応がある場合は食事介助してよいか。

→意識反応がある場合は、喉仏の動きや声が出るか、姿勢が正しく食べられるか、呼吸状態かどうかを観察して判断するとよい。

##### (3) 交流会

##### ①参加者の属性

参加者は35名であった。参加者の主な職種は看護師(看護管理者含む)、介護職(介護福祉士含む)、歯科衛生士・歯科助手、歯科医師、薬剤師であった。

参加者の所属施設の所在地をもとに4つのグループに分け、交流会を実施した。

##### ②交流会での意見交換の主な内容

- ・完全側臥位による食事介助について病棟スタッフの受け入れが難しい現状への解決策の意見がほしい（地域包括ケア病棟の看護師）。
- ・高齢者への食事支援に関する他施設の現状を知りたい（一般病棟の看護師長）。
- ・患者が食べられないものを差し入れする家族への対応について意見を聞きたい（療養病棟勤務の看護師）。
- ・患者本人が食べたい物を食べられるよう病状説明やリスクに関する説明を行っている。患者が亡くなった時にこれで良かったのかと思ってしまう。食事の時の見守りができる体制をどのようにするとよいか考えたい（地域包括ケア病棟の病棟看護師長）。
- ・ALS の患者に対する様々な臨床での介入について知りたい（歯科衛生士）。
- ・摂食嚥下が難しい高齢者に対して、いつまで食べる支援を続けてもよいのか（介護職）。
- ・専門職種が施設にいない場合の嚥下評価の対応について知りたい。
- ・義歯で入院してくる患者への対応として、洗浄剤、歯みがきが大切である（歯科医師）。
- ・食事介助をする時に、怖いと思うことがある（介護職）。
- ・食事は利用者にとって一番の楽しみである。介助側の早く食べて欲しい思いは、急かしていることが伝わってしまう。怖いも伝わる（介護職）。
- ・患者のペースに合わせた食支援が大事である（看護師）。
- ・食事介助に関する内容は、ケース会議で情報共有している（看護職員）。

## 2) 第2回誤嚥・窒息ゼロ研修会の概要

### (1) 講義の概要

講義①急性期病院における誤嚥・窒息予防の取り組みについて

講義②多職種で取り組む口づくりについて

講義③口腔ケアについて

### (2) 交流会

増田聖子弁護士の進行により、講師を囲んでフリートークを行った。

### (3) フリートークの内容（一部抜粋）

- Q.（特別養護老人ホームの介護福祉士）20 分間の口腔のマッサージとあったが、1 回行った結果、講演のスライドのようにきれいになったのか、継続して行った結果きれいになったのか知りたい。また継続して行った場合、どれだけの期間かかったのか教えて欲しい。
- A. 合掌かおり講師（歯科衛生士）→1 回 20 分のケアで、きれいにしないと対象が窒息してしまうので、前準備の加湿やマッサージなどを入れて大体 20 分程度できれいにしている。実際に歯磨きしている時間は、3 分もないと思う。ケアを継続し状態をキープしてくれたのは看護師などの職種であるが、歯科衛生士ほどピカピカにする時間もないと思う。なので、たまに歯科衛生士が行ってピカピカにさせてもらって、後はまた他職種にお願いするかたちで維持をしていくことになる。
- Q.（特別養護老人ホームの歯科衛生士）脳梗塞後遺症で麻痺のある方の義歯作成について、正常咬合で作られていて、食塊形成がきちんと出来ないが、どうしたらいいのか教えて欲しい。
- A. 三輪俊太講師（歯科医師）→入れ歯に特化した知識が必要になるので難しいが、そもそも対象が食塊形成のできる舌の動きがあるのかは見たほうがよい。義歯も使いこなせなくなったら卒業する、使わなくなるというステージが来るので、本当に対象が使えるかどうかの判断をまずして、対応が必要になると思う。舌が動く、ほっぺが動くけれど、食塊形成が出来ない時は、入れ歯が合っていないことはある。現在、歯界展望という歯科医師の雑誌に訪問歯科の入れ歯の作り方を 1 年間連載しているので参考にして欲しい。動く口があるかどうかをまず大前提に見てもらうのがよいと思う。
- Q.（グループホームの管理栄養士・歯科衛生士）1 つ目の講演の誤嚥・窒息アセスメントシートの内容を差し支えなければ教えて欲しい。
- A. 宮田智子講師（摂食・嚥下障害看護認定看護師）→これから活用するシートになるが、まずリスク因子を評価する、リスク因子というのが年齢、既往歴、薬剤、内服薬など、普段食べてみえる食事

の様子などの10項目くらいである。その中で、チェックが1つでも付いたら、食事場面、内服場面を観察するところで、あと食事場面も10項目くらいあり、その中から一つでも該当するようであれば看護問題を立案することになる。食事場面はまず覚醒状態、意識の状態とかはどうか。口の中、汚染が強くないかを観察し、食事食べている時に喉に残らないか、食べた後に喉から吸引した時に食物残渣が出てこないか、義歯が合っているか、そのあたり10項目くらいを観察して次に繋げて記録をしていく。

- Q. (老人保健施設の看護師) 経管栄養の方の口腔ケアを毎日担当していて、食支援においては嚥下評価を言語聴覚士と一緒にラウンドしている。ライフステージにおいて、入れ歯をもう使わなくなる時があると言われたけれど、その基準があれば教えて欲しい。
- A. 三輪俊太講師 (歯科医師) →先ほど紹介した雑誌に連載をしているが、その最終回のテーマがその内容になっている。義歯を卒業させるタイミングはいつなのか、今のところ結論は無く、恐らく、使いこなす能力がなくなった時という判断になるので、随意運動が出来なくなる、自分の意思で口を動かしたりできなくなった時や、原始反射、咬反射など、口に入れたら吸う、噛むというような反射が起きようになった時などは、おそらく卒業のタイミングではないかと考える。現在、複数人で頭を抱えている段階であり、もう少し整理に時間がかかる。今のところ文献上は多分日本の誰も、どの歯科医師もその答えを出せていないというのが現状かと思う。一応、僕の中ではその随意運動が出来なくなった時が1つあると思う。
- Q. (訪問看護師) 在宅にきて合掌さん達と出会うまで、口を動かしていく、口をどういうふうに作っていくかを意識したことがなくて、自分自身が病院でどんな口腔ケアをしていたか、在宅にきた時に振り返ったことがある。病院の忙しい中で口腔ケアをやりたいと思っているが、なかなかできないが現状がある。その日々の口腔ケアの中で、最低このことはやっておくとよいポイントなどあれば教えて欲しい。
- A. 合掌かおり講師 (歯科衛生士) →口が動く人、それか含嗽が出来るか出来ないか、口でブクブクうがい出来るか出来ないかで、大きな違いがある。それが出来る人は最低うがいをしょっちゅうして欲しい。もし出来ない人だったら、スポンジブラシでの優しい粘膜の拭き取り、歯まで磨くのは大変だと思うけれど、粘膜・舌・口蓋の優しいふき取りを優しいスポンジブラシでやって欲しい。歯科衛生士が来た時、粘膜の汚れが無かったら後は歯を徹底的にきれいにし、時間短縮もできるし、患者の負担も減るので毎日粘膜をきれいに拭き取るだけで、とても助かる。
- Q. (訪問看護師) 優しいスポンジブラシとは、どのようなものか。
- A. 合掌かおり講師 (歯科衛生士) →スポンジブラシのキメを見て選ぶとよい。キメの粗そうなのは、特に急いでやるとめっちゃめっちゃ痛い。一度、看護師の皆さんでいろいろなスポンジブラシ集めて、口の中を拭いてみるとよくわかると思う。

## V. 成果

### 1. 第1回・第2回誤嚥・窒息ゼロ研修会後のアンケート結果

研修会終了時に、評価のためのアンケート調査を行った質問項目は、①職種、勤務先、②研修会の評価、③意見・感想であった。第1回誤嚥・窒息ゼロ研修会は参加者数86名に対し、アンケートの回答が得られたのは43名（回収率50.0%）、第2回誤嚥・窒息ゼロ研修会は参加者88名に対し、アンケートの回答が得られたのは60名（回収率68%）であった。以下にアンケート調査結果を示す。

#### 1) 回答者の属性

表 2-1 回答者の所属施設

所属施設	第1回		第2回	
	人数：名	(割合：%)	人数：名	(割合：%)
病院	17	(39.5)	23	(38.3)
特別養護老人ホーム	15	(34.9)	11	(18.3)
介護老人保健施設	4	(9.3)	8	(13.3)
訪問看護ステーション	2	(4.7)	5	(8.3)
歯科医院	3	(7.0)	4	(6.7)
教育機関	0		2	(3.3)
グループホーム	1	(2.3)	1	(1.7)
小規模多機能型居宅介護	0		1	(1.7)
訪問介護	0		1	(1.7)
薬局	0		1	(1.7)
その他	2	(4.7)	1	(1.7)
所属なし	0		2	(3.3)
合 計	43		60	

表 2-2 回答者の職種

職種	第1回		第2回	
	人数：名	(割合：%)	人数：名	(割合：%)
看護師	21	(48.8)	31	(51.7)
看護助手	1	(2.3)	0	
歯科衛生士	3	(7.0)	11	(18.3)
介護福祉士・介護士	11	(25.6)	6	(10.0)
事務	1	(2.3)	4	(6.7)
医療ソーシャルワーカー	0		2	(3.3)
介護支援専門員	0		2	(3.3)
言語聴覚士	1	(2.3)	2	(3.3)
歯科医師	1	(2.3)	1	(1.7)
歯科助手	1	(2.3)	0	
薬剤師	2	(4.7)	1	(1.7)
生活相談員	1	(2.3)	0	
合 計	43		60	

#### 2) 研修会の評価

表 3-1 第1回研修会満足度

満足度	人数（名）	割合（%）
大変満足	27	62.8
やや満足	15	34.9
普通	1	2.3
やや不満	0	0
不満	0	0
合 計	43	

表 3-2 第2回研修会満足度

満足度	人数（名）	割合（%）
大変満足	44	73.3
やや満足	15	25
普通	1	1.7
やや不満	0	0
不満	0	0
合 計	60	

#### 3) 研修会の評価の具体的な理由（第1回誤嚥・窒息ゼロ研修会）

##### ①講義に関すること

- ・嚥下に影響する薬剤について、薬理動態も含めて分かりやすく解説してもらえ良かった。麻薬のレスキュー薬は、食事や排泄を苦痛なく行えるために、動作前にあらかじめ投与することが常であるが講義にあったように誤嚥のリスク等も考えると使用時間を十分考慮しないといけないと分かった。実践にも役立てていきたい。資料があるとよかった。
- ・薬剤がどのように嚥下に影響しているのかを学べたことや、誤嚥のリスクが高い患者への注意義務があることを再認識できたことは今後の業務に役立つ。
- ・薬剤の副作用や効能によって病状が変わることや、誤嚥事故のリスクの再認識ができた。
- ・食事の誤嚥に関しては薬の副作用も関連してくる。特に眠剤の使用、長期使用されている方でも薬が抜けきっていない、年齢が高くなってきたことが誤嚥に繋がってくる等を学んだ。食事形態、トロミ剤を変更していくのみではなく、薬の副作用の面からも考えなければいけないとわかった。
- ・薬が要因となる嚥下障害があることがわかり、実際注意し観察が必要であることがわかった。現場で実施していきたい。

- ・当施設入所の利用者に薬を多く服用されている食欲不振の利用者がいる。医務室の職員に相談しながら服薬の見直しをしていきたい。
- ・薬の錠剤名の話であり、施設利用者も服薬していると思いながら話を聞く事が出来た。服薬数が多いと服薬有害が発生しやすいことを学び、見直しも必要だと感じた。どんな薬にどんな症状が出やすい等、分かりやすかった。
- ・誤嚥・窒息に対して薬剤の観点からみることは当施設にとって、とても興味深いものであった。
- ・現在、訪問看護の仕事に変わり、病院勤務時より食事介助に携わる場面が少なくなったが、眠剤など薬物で嚥下機能の低下を及ぼす事を改めて勉強できたことは、在宅で安全に摂食できるように嚥下機能のアセスメントに役に立つ。
- ・薬剤の影響による嚥下機能の低下は、考慮すべき視点で勉強になった。
- ・薬の作用や副反応など分かりやすく、看護師としての役割がわかり業務に役立てたいと思った。
- ・嚥下に影響する薬の副作用などについて、影響があることは理解していたが具体的な内容や期間、影響が出た場合の対応の仕方などを知ることができてよかった。
- ・薬剤による嚥下障害は、少し考えてみればわかるが、最近が高齢や疾患ばかりに目が向いていたようで、その視点に気付かされハッとした。
- ・薬剤による嚥下機能低下についても考えるきっかけになった。薬剤の知識が乏しく少し難しかった。
- ・薬が嚥下機能にどのように影響するのかがとても分かり易く、すぐに実践できると感じた。
- ・前半の薬の効果説明については、内容が専門的でどちらかというと看護師向けなのかと感じた。また専門用語も多く介護職員や管理栄養士では分かりにくい部分が多かった。
- ・手元に資料もなく、己の知識不足で薬の種類がわからず前半の話が理解できなかった。
- ・法律的な部分は、介助者がどのような処分になったのか知りたかった。また、リスクは犯人捜しになりがちだが発生させないような環境も必要だと分かった。一度食事介助に対するスタッフの動きを確認する必要があると思った。
- ・事故事例に対しては必ず守らなければいけないこと、譲れない点を再確認した。今後に生かしていきたい。
- ・事故に関して、本人の意向を優先するだけでなく、普段の様子から予見出来る内容（注意事項）が普段からカンファレンスが出来ているかが大切である。なかなか適切に協議が出来ていない事に不安を感じた。
- ・おにぎり事件も、適した食形態で提供しても食べられないと、どうしても食上げや、本人の食べたいものを食べさせてあげたいという意見が出る。当施設では、家族の意向も伺いトラブルに発展しないようにしているが、食上げをしても不適切な形態では無理がでてくるので、結局は、元の嚥下食にもどることが多い。
- ・実際に働く中で、色々な事故を目にしたり関わったりすることがあってもご家族の方から批判的な反応を受けたことがなかったので、ご家族に不信感を抱かせてしまう可能性があると言うことに問題と感じていなかった。裁判事例を聞いて改善するべきところはあると思った。こういった研修がなければ改善点に気づく事はできなかったと思う。
- ・裁判事例では、対象の人として経口摂取させるため取り組んだ結果が、窒息で最期を迎える事例はいろいろ考えさせられた。そして教訓にもなった。
- ・何処も多忙とは思いますが、訴訟まで発展する前に上司や医師のサポートで未然に防ぐ事は出来なかったのか、患者家族との信頼関係はどの程度か、誤嚥リスク危険認知度はどうか、なぜ食後のセッティング後に離れる事をしなかったのか、栄養サポートチームの介入は無いのか、色々考慮する事が山積みで勉強になった。
- ・先生方の講演も、とても実践現場に沿っていて、考えるいい機会になった。
- ・眠剤のことやおにぎりについて考えることがあった。
- ・薬剤による嚥下障害の話や裁判事例についての話は、実務にも役に立つ知識だと思った。
- ・実際の事例でとても分かりやすかった。弁護士、薬剤師の話を聞いた事がとてもよかった。
- ・嚥下に関して薬剤師、弁護士の話が聞ける機会はなかなかないのでとても勉強になる。

## ②交流会に関すること

- ・ディスカッションは系列病院の方と情報交換ができて良かった。「完全側臥位での摂取」を初めて聞いた。新しい知見を得られてよかった。調べてみようと思う。
- ・病院、歯科の方から貴重な意見や取り組みを聞くことができた。
- ・いろいろな職種の貴重な意見を聞かせてもらえた。
- ・交流会で多職種連携が出来て良かった。
- ・多職種の方の嚥下に関する情報や知識を聞くことができた。
- ・地域、施設の方の苦労や創意工夫がとても分かった。
- ・交流会において、他施設、病院でも同じような問題を抱えていると、参考になる意見交換ができた。
- ・交流会で施設側の意見を聞くことができ、連携というところで役に立つと思う。(精神科薬の使い方や服用など：例えば病院では寝かすための薬を寝ていたら内服させない場合もあるが、施設では病院で処方された内服薬はすべて飲ませなくてはいけない。病院からの指示は 100%と思われている)
- ・他病院、他施設で取り組まれている現状を知る事が出来て良かった。
- ・他施設や病院での摂食嚥下の実情や思いを知ることができたことで、今後自分自身がどう関わっていったらいいのか考えるきっかけになった。
- ・トークルームでは施設で働いている方の話が聞けて、視野が広がった。今後サマリーの内容をもっと具体的な記載を心掛けたい。
- ・他施設との交流の機会が少ないため勉強になった。
- ・地域のスタッフの意見や声が聞けるのがよい。病院と施設、地域との効果的な情報連携に役立てたい。
- ・施設や、病院の方々などのリアルな話が聞けて同じ悩みとわかった。多職種からの話で新しい知識も得ることができた。
- ・施設の方の声を直に聞けてとても参考になった。悩みは病院と一緒に思うことがあったり視点が違ってまた別のことで困っていると思ったり、この勉強会を活かして良い連携が取れたらよい。
- ・普段聞けない施設職員の方の話を聞くことができ、参考になった。
- ・暫く病院を離れていたもので、誤嚥の現状を再確認できた。完全側臥位での食事が参考になった。
- ・グループワークでは正しいと思っていたことが覆り、対応を再認識できた。

## ③全体に関すること

- ・利用者の状態について、病状の進行の原因だけでなく事も含め、薬の副作用も把握し総合的な分野の視点から見るために、改めて多職種の連携の必要を感じた。
- ・食事が摂れなくなった時の意思決定支援、リスク管理、説明と同意を考える機会となった。
- ・新しい知識の習得、他施設の状況、困り事を知る事ができた。連携、自施設内での体制に役立てることができる。
- ・誤嚥と窒息を予防するために食事介助を行う。
- ・講義はもちろん、普段では聞けない様な他施設の方の現場の対応の仕方を直接聞く事ができる為すぐに自分の現場に活かしやすい。
- ・看護師には、少し難しく思った。



#### 4) 第1回・第2回誤嚥・窒息ゼロ研修会の意見・感想

表 4-1 第1回誤嚥・窒息ゼロ研修会の参加者の意見・感想・質問等の記述内容（一部抜粋）

分類		記述内容の例示
意見	薬剤の視点をもち支援したい (2)	薬剤にも視点を置き、より良い援助に繋げていきたい 薬には主作用と副作用があり、副作用によって嚥下障害をきたしたり、覚醒状態や震戦などの動作にも影響が出る為注意して観察することが必要だと感じた。日常でみられる覚醒の悪さやふらつきなどは薬の影響があるのではないかと疑う事も必要だと感じた。おにぎりの窒息事故のように本人の食べたいものを食べさせてあげるという事も大切だが誤嚥、窒息のリスクも伴うという事も十分に理解した上でいつも以上に慎重に進める必要があると感じた
	薬剤に関する勉強になった (2)	具体的な薬剤名で誤嚥時の対策を聞きとても勉強になった。他施設の方と交流会で情報などを共有できて良かった。今後、誤嚥時（窒息時）等、ケアスタッフが落ち着いて対応出来るような体験を取り組んでいきたい 服用薬剤の講義を受け大変多くの事を学んだ。普段から服薬、薬剤に関わる事も多いが薬剤に関して専門的な知識があるわけではない為知らない事ばかりであった。服用後どのくらいでどの様な作用がどのくらい続く、それに伴う副作用など具体的に学んだので服用時にはその様な事も理解した上で嚥下状態の観察、介助を行っていききたい
	課題に気づいた (2)	患者が希望すれば、栄養サポートチームの介入なしでミキサー食からレベルUPの食事形態に変更を許されるのか、カンファレンスで検討しないのか、牛乳でムセがあればトロミ剤の使用を検討するのかなど、色々な疑問が山積みであった
	勉強になった (3)	今回、私自身が自施設の話をするばかりで、もっと他の方の話に対して意見を言えると良かった。当病棟では完全側臥位法を実施し患者介入をしていない為、大変興味深く聞く事が出来た
		今日は勉強になった。外国人だが、先生がゆっくり話して、よく理解ができた。交流会で自分の言った事を他メンバーが理解できたか心配である。誤嚥と窒息を予防するために仕事の中にもしっかり注意して、頑張りたい
		今回は薬剤師や弁護士の講義も分かりやすく勉強になった。口腔内の清掃状態、咀嚼機能を保つなどの歯科にできる事は可能な限り役に立てるように連携のサポートに努めたい
	連携の必要性を再認識した (4)	他施設や他業種の意見を聞き、もっと連携していく必要があると感じた 何事も多職種で検討し、予測できるリスクへの対処方法や見守りの体制など整えてから実行に移すことが大切だと感じた
	学び続けたい (1)	家族をはじめ、他部署との連携が大事であり、検討を行っていく事でよりよい支援に繋げていけるように今後も研修等に参加して学んでいきたい
	研修の機会がよかった (1)	地域ごとに分かれたグループ構成は多機能、他職種が集まり互いを知る場となり良かった。もっと、実践現場の人に聞いてもらいたいと思った
	現場で活用できる内容だった (1)	直ちに現場に生かせるような内容であった
要望	嚥下に関する支援の重要性を再認識した (1)	嚥下に関して患者のこと、家族のことを考えながらしないといけないと思った
	今後への提案 (1)	もっと、実践現場の人に聞いてもらいたいと思った
	研修会の内容への要望 (4)	窒息が起こった時に、施設側から当事者にどのような対応をされているのかを知りたい。メンタル面での支援として参考にしたい
		今後、嚥下に重要な姿勢の工夫など事例を交えて知りたい。嚥下に対する記録の書き方も、工夫があったら知りたい。食べることの「楽しみ」「喜び」と誤嚥のリスクは相反することが多いが、上手く両立した事例を知りたい
	今後の実践に活かしたい (1)	窒息の対処法や実際の経験などあれば教えて欲しい
		今日の講義、意見を活かしていきたい
	見逃し配信をして欲しい (1)	一部しか受講できなかったため、YouTubeなどで公開していただけると大変ありがたい
その他	講義資料が欲しい (1)	今日の研修で得た貴重な意見等、参考にしたい。振り返りに使用するため、本日の講義資料を欲しい。また、交流会で他のグループの内容を知りたい
	その他 (1)	義歯等の不具合が難しい

表 4-2 第 2 回誤嚥・窒息ゼロ研修会の参加者の意見・感想・質問等の記述内容（一部抜粋）

分類		記述内容の例示
講義がよかった (11)		三輪先生の講義大変新しい切り口で参考になった
		大変興味深い講演ばかりであり、質問しやすい雰囲気を感じた。今回参加することで、どの場所であつても悩んでいることは共通で、そのことを認識できただけでも参加して良かった
		口腔内の環境によって食事摂取が変わるという認識は以前より持っていたが、具体的に今回の研修で学び、理解する事ができた
		終末期に口腔ケアし、最期にみかんを食べたお話しに驚き、感動した。とても勉強になった
勉強になった (4)		口腔ケア用品についてもう少し自分なりに調べ、適切なものを歯科に置いてもらうなどで患者や家族が購入しやすいようにしたいと思う。また保湿ジェルについても新しい知見が得られたため調べてみようと思った
		誤嚥や窒息について、学ぶ事ができたので、これからに活かしていきたい
口腔ケアの重要性を理解した (10)		癌末期の患者の看取りの事例は大変感動した。今後、緩和ケア看護の向上を図る必要があり、食べることができる口にするというのがどれだけ大切なことか発信したい
		口腔ケアの重要性がとても良く理解できた。口腔ケアに時間を掛けられない現状が有る、今回の学びを少しでも実践し誤嚥のリスクを減らしたい
交流会が良かった (2)		口内環境を整えることの重要性と、今後の福祉医療のサービス提供体制が密接につながっていることが興味深い、看護・介護の事業所展開にも参考になった
		とても良い学びの機会になりました！ 現在、職場で歯科衛生士が1人のためいろいろな場面で判断に悩む事が多いが、今日の研修会でまた明日から頑張ろうと思える元気をいただいた！ 歯科医師の先生や歯科衛生士とお話する事ができ、現地参加して良かった
多職種の取り組みが知れた (4)		様々な職種の方の講演で患者への看護の視点が広がるとともに、今まさに現場で起きている困りごとへの返答と即実践できるものもあった
		多職種の役割の内容を知る事は講義にもあったようにのりしろを増やすことになると、気づく事ができた
意見	多職種が分かりあうことの重要性が理解できた (2)	『のりしろを広げる』他職種の苦悩や喜びを知り、伝え合うことが患者やご家族のために出来る1番の近道だと思った。未来の明るいとても楽しい講演だった
	講義内容を実践に繋げた (8)	動く口に整えるために「加湿」「清掃」「マッサージ」を基本として口腔ケアに取り組んでいこうと思う。最期まで食べる楽しみを持っていただけるように援助していきたい 様々な職種の方の講演で患者への看護の視点が広がるとともに、今まさに現場で起きている困りごとへの返答と即実践できるものもあった
歯科との連携を強化したい (7)		当施設は介護職員に無資格のものが多く施設内研修の中に口腔ケアをぜひ取り入れていきたい
		今後も歯科との連携協働をしていきたいと思う。ただ、訪問歯科についてはまだまだ地域差があると思うので普及していくといいと思う。このような研修会が起爆剤になると思う
		新しい見解や改めて口腔ケアの重要性、誤嚥に繋がるリスクなどを知る事ができ大変満足できる研修となった。今後歯科衛生士や看護師等とも連携を取りつつ利用者様のケアに努めていきたい
	研修が多職種と話す機会となっている (1)	研修のおかげで、多職種と話す機会となっている
認知症がある人への食事介助の難しさや成功体験を経験したことがある (1)		開口されない方の食事介助について、認知症の進行などにより一時的には、無理やりとみられる食事介助をすることになるかもしれないが、ご家族の意向を伺いながら食事を継続することがある。その結果再び食べられるようになる方が経験している
	研修会に参加できてよかった (1)	本日は大変すばらしい研修会をご紹介（合掌先生から岐阜県歯科衛生士会へ）いただき本当にありがとうございました。1回目を知らずちょっと残念だと感じた。訪問診療で歯科衛生士がお手伝いできる診療所、歯科医師の先生方（対応できる歯科衛生士も）が増えることを日々願っている。案内をいただき今回受講させていただくことができ本当に貴重な時間をありがとうございました
今後現地での参加をしたい (1)		本当にアットホームな研修会で大好きです！ぜひぜひ今度こそ現地参加できたらと、思っている
	実際の口腔ケアの動画を見たい (1)	実際の口腔ケアの様子の動画を見せていただける機会があればありがたい
口腔ケアの具体的な方法を聞きたい (1)		現場で直ぐに役立つ情報ばかりで感激している。3人の先生方のお話をもっとゆっくりと、じっくりお聞きしたかった。歯科の先生のお話を聞く機会はない事なので、直接お話がしたかった。また、口腔ケアの手技や注意点など具体的な方法などもお尋ねしたかった。たった3時間ではもったいないと感じるくらい、お一人おひとりの先生のお話は大変興味深い内容だった
	情報共有をどうすると良いか知りたい (1)	病院、老健等から入所して来る方々の、口腔機能状況の把握が出来づらい現在、他施設、病院との横の繋がりを作っていく事の大切さを痛感している。情報共有、どうすれば上手くいくのか
質問	口腔内に指を入れることで噛みつきなどといったリスクがあり、現場では指を入れないようにと言われていたが、何か対策があるのか	
	口腔ケア時の対応方法を知りたい (2)	口腔内の乾燥を防ぐには、病院等では温度・湿度等を管理しているが、居宅においてその辺りの管理はどのように行えばよいか？家族にとっても難しいところだとおもうが？経済的にも加湿器などの購入も難しいのではと思われる。また、家族も高齢者の場合は特にだと思ふ
要望	音声聞こえにくい (1)	音声聞こえにくかった

## 5) 修了証の発行

第1回誤嚥・窒息ゼロ研修会と第2回誤嚥・窒息ゼロ研修会の両日に参加し、修了証の発行を希望した者15名にPDF版で発行した。

## VI. 教員の自己点検評価

### 1. 看護実践の場にも与えた影響

本研修会の成果としては、岐阜県内で高齢者の食を支援している看護職をはじめとした多職種を対象に、先行研究で明らかになった課題解決に向けて取り組みができたことである。具体的には、食を支援する看護職・介護職への教育・研修の機会が不足している、学習体制が整備されていない現状を鑑み、多施設で勤務する食を支援する多職種が学習できる研修会のテーマを選定し開催した。

結果、高齢者の誤嚥・窒息を防ぐため、岐阜県内で高齢者の食を支援する看護職をはじめとした多職種に、誤嚥・窒息防止に向け現場で活用できる知識を提供し、さらには多職種が施設や職の壁を越えて語り合い・交流できる、共に学び合う多職種連携に繋げることに貢献できた。

### 2. 本学の教育・研究にも与えた影響

超高齢社会の中で、高齢者の誤嚥・窒息防止は喫緊の課題であり、多職種・多施設が注目している話題でもある。学部授業においても、高齢者の誤嚥・窒息防止については、高い話題性があるため卒業研究の模擬事例で活用した。多職種・多施設連携においては、機能看護方法4の学生と教員による模擬カンファレンスでも取り入れた。

また、本事業の協力者である岐阜市民病院の協力者とは、令和4年度から「誤嚥・窒息アセスメントシートを活用した看護実践能力向上への取り組み」の共同研究を開始した。

## VII. 今後の課題、発展の方向

本事業は、本学の在宅看護支援に関する研究助成事業（2020～2021年度）「高齢者の誤嚥・窒息ゼロに向けた看護職・介護職の課題及び多職種・多施設協働に向けた課題の明確化」の取り組みを出発点とし、継続した取り組みとしては3年目となる。3年目を迎え、岐阜県内の多職種・多施設からは、継続した取り組みを期待されるようになり、地域貢献に寄与している。今後もシリーズ化した研修会を継続し、取り組みをしていきたい。

さらなる発展として、地域における高齢者の“おいしい食べ物を口から食べる”という生きる喜びや意欲を支える食支援を実現するために、高齢者とその介護者も、誤嚥・窒息を予防できるような知識・技術が身につけられるような支援を考案していきたいと考えている。



# 資料



# 看護実践研究指導事業の趣旨

岐阜県立看護大学 看護研究センター

## 1. 本事業の目的

本事業は、県内看護職が大学の知的資源を利用して自己研鑽や日常の業務改善ができるようにすることを目指し、看護実践研究に係る研修事業として開学2年目(2001年)から事業を開始し、令和4年度で22年目を迎えます。本学が県立大学であることを強く認識し、看護学の高等教育機関の社会的使命や在り方を踏まえて県内看護職の質向上を実現する一つの手段として取り組んでいるものです。

実施に際しては、単に知識伝達型の一方通行的な講義で行うのではなく、

- 1) 教員が現場に出向いて県内の看護職の現状を把握することを基本とすること
- 2) 看護職者やその実践の実態に即応した適切な指導・研修の方法を開発すること
- 3) 現職の看護職者自身の主体的問題解決を促進すること

などを重視しています。

また、大学としては、今後の看護学科や大学院看護学研究科の教育研究環境の一層の充実を図り、本学で育成した人材の県内施設への就業と定着しやすい環境づくりを目指すことも目的として本事業に取り組んでいます。

## 2. 本事業の要件

岐阜県の看護職者を対象として、看護職者が実施している看護実践活動の実態と課題を大学教員として確認し、それらの看護職者が提供する看護実践の質向上を図る上で有効であるとして、教員が企画した研修であることを要件とします。

ただし、特定施設や特定地域に限定することなく、提起した課題に関する研修は、岐阜県の全域の状況に対して責任を持って企画することを基本とします。

看護職者は、専門職であることから、自己の技術や実践方法の改善・充実について研究的取り組みを行うのは必然です。そのため、大学としては、看護実践研究の実施を奨励することを手段としつつ、主体的専門職者育成を前提にして県内看護職者への研修を事業として実施します。

## 3. 本事業の運営

大学と岐阜県内の看護実践現場における看護職者との個別の連携や組織的連携を強化するという観点から、本事業の全体的な調整・進行管理や報告書の取りまとめなどの運営は、看護研究センターが担っています。

### これまで開発した看護職者やその実践の実態に即応した適切な指導・研修の方法

- ・ 対象看護職者の職場を個別訪問し、実態を悉皆的に把握する方法、およびその対象看護職者を小集団教育という形で集め、教員が把握した実態を共有するワークショップを行う方法が極めて有効であった。
- ・ 対象看護職者が自らの実践の現状を振り返ることを通して、看護サービス受領者への責任性を再認識することができれば、業務改善を主体的に考える機会となり、有効となることが確認された。
- ・ 対象看護職者にとって、他施設の看護職者と情報や意見を交換することが極めて大切であり、横のつながりの乏しい看護職者同士のネットワークに発展する機会となれば、互いに学びあう関係性づくりに寄与でき、岐阜県域においてはこのような配慮も有効であった。

## 実施した研修と対象・方法

研修 No.	研修名等	対象者	実施方法		実施年度
			個別訪問 面接研修	集合研修 研修会等	
1	県内の過疎地域診療所等の看護職者への研修	過疎地域の診療所・市町村等の看護職者・職員	○	○	平成 13～18 年度
2	県内の高齢者ケア施設の看護職者への研修	県内の全ての特別養護老人ホーム・介護老人保健施設・医療保険適用の療養病床の看護職者	○	○	平成 13～21 年度
3	一病院における看護倫理に関する研修	当該病院の看護職者等	○	○	平成 15～20 年度
4	岐阜県看護実践研究交流会への研究支援	会員のうち申請した看護職者	面接・メール等による個別の研究支援		平成 15～30 年度
5	特別支援学校における医療的ケア研修	県内の全ての特別支援学校の教職員	○	○	平成 17～19 年度
6	県内実習施設の看護職者の指導能力の向上研修	実習施設の管理者及び実習指導の看護職者	○	○	平成 17～19 年度
7	本学卒業生の看護生涯学習支援	県内に就業した卒業者とその施設のトップマネージャー	○	○	平成 18～20 年度
		本学の新卒者、卒後 2 年目の卒業者	新卒者と卒後 2 年目卒業者の交流会開催		平成 21～22 年度
8	助産師の専門性を高める研修	卒業者を含む助産師		○	平成 19～21 年度 平成 23～24 年度
9	訪問看護ステーション活動の充実に向けた研修	県内の訪問看護ステーションの看護職者	○	○	平成 21～25 年度
10	管理的立場にある保健師への研修	管理的立場にある県保健所・市町村保健師		○	平成 24 年度
11	看護研究のための研修会	県内の医療・保健・福祉機関の教育担当者、看護研究担当者		○	平成 24～25 年度
12	利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	県内全ての医療機関の看護職者	○	○ ※	平成 24 年度～ (継続中)
13	地域における母子保健活動の充実に向けた研修会	県内の助産師・保健師、NICU や小児領域の看護師		○	平成 25 年度 ～令和元年度
14	特別支援学校に勤務する看護師の専門性の向上と自立への支援	県内の特別支援学校の看護師	○	○	平成 25～26 年度
15	地域包括ケアを推進するマネジメント能力向上のための研修	県内の看護管理者、中堅看護師	○	○ ※	平成 27 年度 ～令和 3 年度
16	卒業者のキャリアアップ支援のための研修会	本学卒業者		○	平成 28 年度
17	養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	本学卒業者を含む卒後 4～6 年目程度となる養護教諭		○ ※	平成 28 年度～ (継続中)
18	専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	県内の専門看護師		○ ※	平成 28 年度～ (継続中)
19	医療的ケアを必要とする子どもの放課後等児童デイサービスにおける実践活動の充実を目指した研修会	放課後等児童デイサービスだけに限らず、重度な障がいをもつ子どもに関わる施設・事業所		○	平成 30 年度
20	岐阜県における End-of-Life Care 充実に向けた研修会	「ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム」受講修了者		○	平成 30 年度 ～令和元年度
21	地域の実態に即した子育て支援の充実に向けた保健師の役割を考える研修会	市町村保健師 保健所の母子保健担当保健師 県の子育て支援担当保健師	○	○ ※	令和元年度 ～令和 3 年度
22	看護実践研究学会への研究支援	学会員のうち申請した看護職者	面接・メール等による個別の研究支援		令和元年度～ (継続中)
23	高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会	県内で高齢者の食を支援している看護職者を含む多職種		○ ※	令和 4 年度

(注)実施方法で※印を付けた研修では、令和 2 年度以降、Zoom や Teams によるオンライン研修を含む。



## 研修を支えた教員数

注) 表中の数値は事業課題の担当教員数を示す。

ただし、No. 4 は研究支援担当の教員数（延べ数）、No. 22 は括弧内が研究支援担当の教員数である。

研修 No	研修名等	実施年度																		
		平成 13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
1	県内の過疎地域診療所等の 看護職者への研修	28	18	17	16	16	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2	県内の高齢者ケア施設の看護 職者への研修	11	8	12	10	12	13	13	12	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
3	一病院における看護倫理に 関する研修	—	—	10	9	8	10	10	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4	岐阜県看護実践研究交流会 への研究支援	—	—	14	13	22	28	19	31	21	7	22	17	21	17	14	24	28	16	
5	特別支援学校における医療 的ケア研修	—	—	—	—	11	12	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
6	県内実習施設の看護職者の 指導能力の向上研修	—	—	—	—	11	10	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
7	本学卒業者の看護生涯学習 支援	—	—	—	—	—	10	10	10	8	7	—	—	—	—	—	—	—	—	
8	助産師の専門性を高める研 修	—	—	—	—	—	—	7	6	7	—	6	5	—	—	—	—	—	—	
9	訪問看護ステーション活動 の充実に向けた研修	—	—	—	—	—	—	—	—	5	5	7	9	9	—	—	—	—	—	
10	管理的立場にある保健師へ の研修	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	—	—	—	—	—	—	
11	看護研究のための研修会	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	8	—	—	—	—	—	

研修 No	研修名等	実施年度											
		平成 24	25	26	27	28	29	30	令和 元	2	3	4	
12	利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上 に向けた看護職者への教育支援	6	5	5	6	8	7	7	7	7	7	7	
13	地域における母子保健活動の充実に向けた研修 会	—	5	7	8	8	8	9	10	—	—	—	
14	特別支援学校に勤務する看護師の専門性の向上 と自立への支援	—	7	6	—	—	—	—	—	—	—	—	
15	地域包括ケアを推進するマネジメント能力向上 のための研修	—	—	—	5	5	6	7	7	8	7	—	
16	卒業者のキャリアアップ支援のための研修会	—	—	—	—	8	—	—	—	—	—	—	
17	養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を 目指した学びの会	—	—	—	—	3	3	3	3	2	2	2	
18	専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	—	—	—	—	6	6	6	7	7	8	9	
19	医療的ケアを必要とする子どもの放課後等児童 デイサービスにおける実践活動の充実を目指し た研修会	—	—	—	—	—	—	8	—	—	—	—	
20	岐阜県における End-of -Life Care 充実に向け た研修会	—	—	—	—	—	—	5	4	—	—	—	
21	地域の実態に即した子育て支援の充実に向けた 保健師の役割を考える研修会	—	—	—	—	—	—	—	9	9	9	—	
22	看護実践研究学会への研究支援	—	—	—	—	—	—	—	5 (14)	4 (10)	5 (10)	5 (11)	
23	高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	

## 平成 13 年度～令和 4 年度の看護実践研究指導事業一覧

表中の「研修 No.」は、実施した研修と対象・方法の表で示した「研修 No.」である。

平成 13 年度	研修 No.
過疎地域国保診療所の看護活動の充実に向けて	1
特別養護老人ホームの看護活動の充実に向けて	2
平成 14 年度	研修 No.
過疎地域の看護活動の充実に向けて	1
特別養護老人ホームの看護活動の充実に向けて	2
平成 15 年度	研修 No.
岐阜県における過疎地域の看護活動の充実	1
岐阜地区を対象にした特別養護老人ホームの看護活動の充実	2
病院利用者の満足度調査から導く看護実践の改善に向けて	3
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
平成 16 年度	研修 No.
岐阜県における過疎地域診療所利用者への看護活動充実に向けて	1
岐阜県における介護老人保健施設の看護活動の充実に向けた研修	2
病院利用者の満足度調査から導く看護実践の改善に向けて	3
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
平成 17 年度	研修 No.
岐阜県における過疎地域診療所利用者への看護活動充実に向けて	1
岐阜県における介護老人保健施設の看護活動の充実に向けた研修	2
病院利用者の満足度調査から導く看護実践の改善に向けて	3
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
養護学校における医療的ケアのための教職員の役割・機能と関係機関との連携	5
岐阜県内実習施設の看護職（臨地実習指導者）との共同体制整備に向けて	6
平成 18 年度	研修 No.
岐阜県における過疎地域診療所利用者への看護活動充実に向けて	1
岐阜県における介護老人保健施設の看護活動の充実に向けた研修	2
利用者中心の看護実践に向けての倫理的視点からの取り組み	3
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
養護学校における医療的ケアのための教職員の役割・機能、および関連機関との連携	5
岐阜県内実習施設の看護職（臨地実習指導者）との共同体制整備に向けて	6
本学卒業生の職場定着と看護実践研究の支援	7
平成 19 年度	研修 No.
岐阜県内の高齢者ケア施設における看護活動の充実に向けて－医療保険適用の療養病床に焦点をあてて－	2
利用者中心の看護実践に向けての倫理的視点からの取り組み	3
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
特別支援学校における医療的ケアのための教職員の役割と機能および関連機関との連携	5
岐阜県内実習施設の看護職（臨地実習指導者）との共同体制整備に向けて	6
本学卒業生の職場定着と看護実践研究の支援	7
学士課程で学んだ新人助産師の実践能力育成のための支援プログラムの開発	8
平成 20 年度	研修 No.
岐阜県内の高齢者ケア施設における看護活動の充実に向けて－医療保険適用の療養病床に焦点をあてて－	2
利用者中心の看護実践に向けての倫理的視点からの取り組み	3
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
本学卒業生の職場定着と看護実践研究の支援	7
助産師の専門性を高める研修プログラムの開発	8

平成 21 年度	研修 No.
岐阜県内の高齢者ケア施設における看護活動の充実に向けて－医療保険適用の療養病床に焦点をあてて－	2
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
本学新卒期卒業生への就業・看護生涯学習支援	7
助産師の専門性を高める研修プログラムの開発	8
地域における訪問看護ステーションの活動を充実・発展させるために	9
平成 22 年度	研修 No.
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
本学新卒期卒業生への就業・看護生涯学習支援	7
地域における訪問看護ステーションの活動を充実・発展させるために	9
平成 23 年度	研修 No.
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
助産師の専門性を高める研修プログラムの開発	8
地域における訪問看護ステーションの活動を充実・発展させるために	9
平成 24 年度	研修 No.
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
助産師の専門性を高める研修プログラムの開発	8
地域における訪問看護ステーションの活動を充実・発展させるために	9
管理的立場にある保健師の抱える課題に基づく保健師管理者研修プログラムの開発	10
実践現場における看護実践の改善・改革を推進する看護研究の支援方法の開発	11
利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
平成 25 年度	研修 No.
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
地域における訪問看護ステーションの活動を充実・発展させるために	9
実践現場における看護実践の改善・改革を推進する看護研究の支援方法の開発	11
利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
地域における母子保健活動の充実に向けた研修会	13
特別支援学校に勤務する看護師の専門性の向上と自立への支援	14
平成 26 年度	研修 No.
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
地域における母子保健活動の充実に向けた研修会	13
特別支援学校に勤務する看護師の専門性の向上と自立への支援	14
平成 27 年度	研修 No.
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
地域における母子保健活動の充実に向けた研修会	13
看護の専門性を高める看護管理者のマネジメント能力向上に向けた支援	15
平成 28 年度	研修 No.
岐阜県看護実践研究交流会会員への研究支援	4
利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
地域における母子保健活動の充実に向けた研修会	13
看護の専門性を高めるマネジメント能力向上に向けた支援	15
卒業生生涯学習支援事業	16
専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	18
看護教諭のスキルアップと看護教諭像の醸成を目指した学びの会	17

平成 29 年度	研修 No.
岐阜県看護実践研究交流会への研究支援	4
利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
地域における母子保健活動の充実に向けた研修会	13
看護の専門性を高めるマネジメント能力向上に向けた支援	15
専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	18
養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	17
平成 30 年度	研修 No.
岐阜県看護実践研究交流会への研究支援	4
利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
地域における母子保健活動の充実に向けた研修会	13
看護の専門性を高めるマネジメント能力向上に向けた支援	15
専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	18
養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	17
医療的ケアを必要とする子どもの放課後等児童デイサービスの実践活動の充実を目指した研修会	19
岐阜県における End-of-Life Care 充実に向けた研修会	20
令和元年度	研修 No.
利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
地域における母子保健活動の充実に向けた研修会	13
看護の専門性を高めるマネジメント能力向上に向けた支援	15
専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	18
養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	17
岐阜県における End-of-Life Care 充実に向けた研修会	20
地域の実態に即した子育て支援の充実に向けた保健師の役割を考える研修会	21
看護実践研究学会への研究支援	22
令和 2 年度	研修 No.
利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
看護の専門性を高めるマネジメント能力向上に向けた支援	15
専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	18
養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	17
地域の実態に即した子育て支援の充実に向けた保健師の役割を考える研修会	21
看護実践研究学会への研究支援	22
令和 3 年度	研修 No.
利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
地域包括ケアを推進するマネジメント能力向上のための研修	15
専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	18
養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	17
地域の実態に即した子育て支援の充実に向けた保健師の役割を考える研修会	21
看護実践研究学会への研究支援	22
令和 4 年度	研修 No.
利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援	12
専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会	18
養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会	17
看護実践研究学会への研究支援	22
高齢者の誤嚥・窒息ゼロを目指す研修会	23

## 令和4年度「看護実践研究指導事業報告書」の原稿について

### 1. 提出期限・提出先等

原稿	指定枚数	提出期限	提出物	提出先
本文	制限無し(前年度と同程度で)	令和5年2月24日(金) 正午	印刷した原稿1部	看護研究センター417 (担当：加藤、山田) ※担当者不在の場合は、 4階中央エレベーター前 の鍵付きボックス(看護 研究センター表記)へ
総括報告 (今年度終了 事業のみ)	6枚以内		Wordで作成した 原稿データを入 れたメディア*	

\*メディアは看護研究センター事務局から2月に事前配布するUSBメモリを使用してください。  
また、メディアには報告書原稿のWordファイルとともに下記の2つのファイルも保存してください。  
代表者による自己点検評価(Excelファイル)  
看護実践研究指導事業で関与した施設一覧(Excelファイル)

### 2. 留意事項

- 1) 原稿提出期限は厳守してください。締め切り後の原稿の全面的な差し替えは印刷スケジュールの関係で認めていません。なお、締め切り日までに提出されない場合は掲載しません。
- 2) 原稿は必ずメンバー間で誤字・脱字および体裁の最終点検を経て提出してください。

### 3. 報告書原稿提出後の予定

3月1日(水)午後 原稿の修正依頼(必要な代表者のみ)

3月8日(水)正午 修正原稿締め切り

提出物：修正後の原稿だけを保存したメディア、修正依頼時に返却した  
原稿

提出先：看護研究センター417(担当：加藤、山田)

3月15日(水)～22日(水)正午 校正原稿の著者確認・修正

3月31日(金) 報告書の納品

※上記のスケジュールは現時点での予定です。印刷業者との打合せ後に日程が変更となる可能性があります。ありますが、その場合は看護研究センターから各代表者に連絡します。

### 4. 報告書の別刷(抜刷)の印刷について

報告書の本文(担当事業分)について、希望する場合は別刷(抜刷)を印刷します。希望する場合は印刷部数を1月末までに看護研究センター(nccenter@gifu-cn.ac.jp)へ連絡してください。

## 「看護実践研究指導事業報告書」の原稿執筆要項

### ＜執筆内容について＞

#### 1. 今年度の事業報告

本文には、以下の内容を必ず含めてください。

- ・テーマ、担当教員
- ・キーワード(3～5 個程度)
- ・目的(本事業の必要性)
- ・本事業で実施したこと(実施方法・内容・結果)

＊結果には、個別訪問研修、ワークショップ、報告会等、方法ごとの実績として、  
対象施設の種類・対象者の職種(・職位)別の数、修了証の交付数を含む

- ・参加看護職の意見
- ・教員の自己点検評価
- ・今後の課題、発展の方向性

※備考 報告書原稿の締め切り後の研修会開催等、今年度の報告書に活動実績を掲載できない場合、  
その内容は次年度の報告書原稿に記載してください。また、前年度の活動実績で前年度の報告書に掲載できなかった内容は、本年度の報告書原稿に記載してください。

#### 2. 今年度に終了するテーマの総括報告(上記 1. とは別に必要)

以下の内容を必ず含め、6 枚(A4)以内で作成してください。

- ・テーマ、担当教員
- ・キーワード(3～5 個程度)
- ・目的(本事業の必要性)
- ・実施方法・内容・結果(参加看護職数・面接者数等、数量的な実績を含む)
- ・成果(実践現場・看護職に与えた影響、看護職の研修としての有用性、本学の研究・教育活動に与えた影響など)
- ・実施にあたり困難な(困難だった)点、工夫したことなど

#### 3. 倫理的配慮

報告書は、冊子刊行後、本学が運営管理するホームページや本学の教育研究活動の成果物を電子的形態で蓄積・管理している岐阜県立看護大学リポジトリなどを通じてインターネット上に公開しますので、執筆内容は倫理面を十分ご配慮ください。

なお、岐阜県立看護大学リポジトリは、本学ホームページのトップページ(広報・地域連携)にあるメニュー リポジトリ・紀要・研究報告 からアクセスできます。

## ＜執筆様式について＞

原稿はオフセット印刷としますので、書き方は必ず下記に従ってください。

- 1) 書式はA4縦置き横書きで、ワードプロセッサを使用する。
- 2) 図・表を含め1段組みで1ページとする。但し、内容によっては、表のみをまとめて、資料として本文末に添付する形式も可能であるが、資料は必要最小限にする。
- 3) 余白は上20mm、下20mm、右25mm、左25mmとし、「標準の文字数を使う」を指定する。
- 4) ポイント数は、本文(見出しを含む)10ポイントとする。
- 5) フォントについては以下のようにする。
  - ・本文中の見出し“Ⅰ.”および“1.”：MSゴシック太字
  - ・本文中の見出し“1)”：MSゴシック
  - ・“(1)”以下の見出しおよび見出し以外の本文：MS明朝
- 6) 見出し番号は、Ⅰ. → 1. → 1)とし、これ以下は(1)もしくは①とする。なお、(1)の数字は半角とし、それ以外の数字、「.」、片括弧“)”および両括弧“()”はすべて全角とする。
- 7) 見出し番号以外の本文中にでてくる数字は、すべて半角とする。
- 8) 句読点は「、」「。」を使用する。
- 9) 文献の書き方は、本学紀要に準じる。
- 10) ページ番号は入れない。
- 11) アンダーライン、網掛けは使用不可とする(印刷したときの不鮮明さを防ぐため)。
- 12) 図・表は、印刷したときに鮮明に見えるかを配慮し、適切な表現に留意する。

## 令和 4 年度 看護実践研究指導事業の自己点検評価 実施要領

### ◆ 教員

#### 1. 方法

事業代表者の教員が共に取り組んだメンバーの意見を総括して、下記のフォーマットに記載してください。把握していない部分がある場合は空欄でもよいので、可能な限り記入する努力をお願いします。

**\*記載期限：**令和 5 年 2 月 24 日(金)正午

**\*フォーマット：**添付の Excel ファイル(↓ポータルサイトのサイボウズにも掲示)

サイボウズ／ファイル管理／看護研究センター／看護実践研究指導事業にあります。

**\*提出方法：**看護研究センター事務局から配布する USB メディアに保存

#### 2. 評価項目

- 1) 実践の場を与えた影響
  - ① 看護活動の変化
  - ② 看護職の行動・認識の変化
- 2) 本学の教育・研究活動に与えた影響
  - ① 教育活動への効果
  - ② 研究活動への発展
- 3) 本事業を通して捉えた看護職の生涯学習ニーズ
- 4) 本事業を実施する上で困難な点・課題
- 5) 今後の発展の方向性

### ◆ 看護職

参加看護職の意見の調査方法と調査結果のとりまとめを本事業報告書の本文内に明記してください。



本冊子の企画・編集は令和4年度に行い、看護研究センターが携わりました。

学内から申請された看護実践研究指導事業の実施にあたっては看護研究センター運営委員会に諮り、いただいた意見を反映させています。

掲載した看護実践研究指導事業の各研修につきまして、ご意見等を看護研究センター(E-mail : nccenter@gifu-cn.ac.jp) までお寄せいただけると幸甚です。

#### 【看護研究センター運営委員会】

委員長	： 奥村美奈子	センター長	(看護研究センター)
委員	： 北山三津子	学長	(地域基礎看護学領域)
	森 仁実	学部長	(地域基礎看護学領域)
	松下 光子	研究科長	(地域基礎看護学領域)
	藤澤まこと	教授	(地域基礎看護学領域)
	橋本麻由里	教授	(機能看護学領域)
	岡永真由美	教授	(育成期看護学領域)
	古川 直美	教授	(成熟期看護学領域)
	大川眞智子	教授	(看護研究センター)
	長屋 由美	研究交流促進部会長	(看護研究センター)

#### 【看護研究センター】

奥村美奈子	センター長	
大川眞智子	教授	
会田 敬志	教授	
小澤 和弘	准教授	
長屋 由美	准教授	
足立 円香	講師	令和5年1月から
小森 春佳	助教	令和4年9月まで
加藤 優子	事務職員	
山田 一子	事務職員	令和4年9月から
加納裕美子	事務職員	令和4年7月まで

発行日：令和5年3月31日

編集：看護研究センター

発行：岐阜県立看護大学

〒501-6295

岐阜県羽島市江吉良町 3047-1

TEL : 058(397)2300(代表) FAX : 058(397)2302

URL : <https://www.gifu-cn.ac.jp>

メールアドレス : nccenter@gifu-cn.ac.jp

本冊子の記述、図表の著作権は岐阜県立看護大学に帰属します。  
無断転記は一切お断りします。





